
リフラスタ大戦～人物紹介～

さすらいの旅猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リフラスタ大戦〜人物紹介〜

【Nコード】

N4195M

【作者名】

さすらいの旅猫

【あらすじ】

ある空間に存在するリフラスタ大陸。そこはまだ剣と魔法がものを言う世界。

赤い石・青い石・緑の石で竜人王を封印した大戦から1000年が経っていた。当時の大戦で活躍した英雄達である戦士のオーガ・二刀流剣士のジュライそして魔術師のコーネリアらの建国した3大国である、オーガ国・ジュライ国・コーネリア国は長い間平穏な日々を送っていた。しかし、そんな平和な日々も終わりを迎えようとして

いた。現コーネリア国の国王である、リトアス王の命令の下、コーネリア国によるオーガ国に対する侵略が行われたのだった。不意打ちとも言える侵攻によりオーガ国は陥落寸前であった。

リフラスター大戦〜人物紹介〜（前書き）

戦い描写アリですが、やわいものです。

リフラスタ大戦〜人物紹介〜

登場人物

ジュライ国

マルク（ ） 18歳。

英雄ジュライ直系の血筋を持ちジュライ国の王子。

城では日々剣の訓練にあけているが、それは仮の姿。父親であるデイル王がうるさいのでしたがっているフリをしているだけである。

城から抜け出してはケイミから情報収集をしたりしている。魔法と学問はダメ。しかし剣の腕は確か。

ケイミ（ ） 18歳。

小さい頃に城の抜け道から出て森で遊んでいたマルクに出会う。いつも笑顔をくずさずニコニコしている。その笑顔とは裏腹に凄腕の魔術師。マルクの頭脳でもあり、親友。なにやら秘密があるらしいが、マルクもそれは知らない。

ピット（ ） 24歳。

ジュライ国隠密部隊の隊長。その存在は表になっていなく王に直に使える部隊。・・・とは言うものの平和な世界のためにあまり仕事はない。主な仕事と言えばマルクのお守りである。そんなピットは日頃、あまり仕事がなく相棒の森狼のシャロンとぐーたらしている。戦いになると左右の腰に所持しているダガーナイフで戦う。

デイル・ジュライ（ ） 55歳。

現ジュライ国の国王。文官としては有能だが武術に関して

あまり才能がない。マルクの父親でもある。

コーネリア国

リトアス・コーネリア（ ） 50歳

今回の戦争の発端となった人物。密かに竜人王の復活をはかる。現存する魔術師においては大陸最強を誇っており

竜人王を復活させることにより大陸全土の支配を目論む。

最近は様子がおかしい。

レイリ（ ）

26歳。コーネリア3将軍の一人であり指揮能力にとっても長けている。

個人としての強さもピカイチ。腰には眺めの長剣を帯剣している。

冷静でとてもクール。リトアスの竜人王復活の計画をまだ知らない。

ジーク（ ）

25歳。元はコーネリアで名高い傭兵で黒の短髪で体格が良く長身。いつもレザーアーマーにブーツといった簡素な格好。竜人王復活の計画にも

乗り気であり前のレイリ以外の3将軍二人の解任にあたり新たに任命された。

戦闘では愛用の剣レイピアで戦う。サシの対決以外には興味なく1対1の

戦いを好む。正々堂々というわけではなく純粋に強さを比べたいからである。

ウィーゼ（ ）

20歳。ジークと共に新たに将軍に任命された。黒髪で整った顔立ちをしている。

武器は所持していない。コーネリアでは知る人ぞ知る魔術師。寡黙な青年。

黒ローブの男（^{ジン}）

年齢不詳。オーガ侵攻の少し前に現れた。普段は常にリトアスの隣に控えていて、腕には4つのくぼみのある金のサークレットをはめている。

金色の髪に真紅の瞳をしており、貴族風の男。

リフラスタ前編

第一章アークス城攻略

ここオーガ国は約900年もの歴史があり、リフラスタ大陸において大陸最古の国の

1つでもある。大陸の中央に位置しており、北にはコーネリア国、南にはジュライ国と

並んでいる。オーガ国の王都であるロストに悠々とそびえたつアークス城の周りには高い壁が

並んでおり、鉄壁の守備を誇っていた。今日この日までは……。

アークス城の玉座は城の最上階に位置しており、その玉座を目指し1人の女騎士が

長い長い廊下を歩いていた。二人の兵士が後についており、これまでの戦況の報告を

している。兵士は肩にコーネリア国の紋章である、竜が両翼を広げたエンブレムが入った

鎧をつけていて、コーネリア軍であることが窺えた。女騎士はと言うと20代半ばくらい

であろうか。肩ほどまで伸びた艶やかな整った長い黒髪は誰が見ても美しいと言うであろう

、腰にはやや長めの剣を帯剣している。切れ長のサファイアブルーの美しい瞳をしていて容貌の整った顔立ちをしている。首からは3人の将軍にしか与えられないと

言われているコーネリア国のエンブレムの入ったペンダントをぶらさげている。

そのペンダントだけでこの女騎士のコーネリアでの身分は簡単に想像できる。

部下の兵士の報告が一通り終わると、女騎士は丁寧な口調で

「わかりました、ご苦労様です。」

そう一言だけ告げた。そして玉座の間の扉を遠慮もなく勢いよく開いた。

そこは王室ではあるものの高級そうな絨毯が敷いてあるだけで、他にはあまり装飾の

施されていない部屋であった。その絨毯も戦いの後ということもあり、所々汚れていた。

部屋の中には十数人のコーネリア兵がいて、女騎士が部屋に入ると敬礼の意を表し右手を

胸に当て、右膝を地面に着き低頭した。部屋の中央には紅い指輪をしている男が1人。

上質な服を纏っていて、それだけでこの男の身分は察することができるだろう。

ただし、今はロープで縛られていて床に座らせられていて服もボロボロであり

息も絶え絶えになっている。今はこんな状態だが少し前までは3大国の1つオーガ国を治めていたラクロス王なのである。

「レイリ將軍か……。」

ラクロスは疲労しきっていて虚ろな目で女騎士を見上げた。

「お初にお目にかかります、ラクロス様」

軽く低頭をし、形式的な挨拶をする。これでも少し前までは国王だったのだ。

「我が陛下の望みの品を頂きに参りました」

そういうとレイリは部屋の中央に縛られて身動きができなくなっている

ラクロスのもとまで来てしゃがみこみ、紅い指輪をラクロスの指から抜き取った。

見る者を取り込んでしまいそうな程深い紅をしている指輪だった。宝石など装飾品には興味がないレイリではあるが、この指輪の宝石の紅にはとても魅せられてしまっていた。吸い込まれてしまいそうだった。

「指輪欲しさに国1つ滅ぼすか・・・いや目的はその指輪の宝石の方だろうが。」

ラクロスの声にレイリは我に返った。指輪を箱に納め、立ち上がりラクロスに視線を落とした。ラクロスはレイリの目を見据え尚も続けた。

「それを欲しがるということはリトアスは伝説の場所がわかったのか？」

「いえ、私が陛下より預かった命は指輪を奪えというものなので」

「レイリ将軍は何も知らされずにその指輪を奪いにきたのか？」

ラクロスは呆れたような口調になっていた。確かにレイリ自身、指輪については

何もリトアスからは聞かされていないのである。今回のオーガ侵攻においても

疑問をかかえていた。そもそもオーガ国とコーネリア国は長年に渡

り上手く

やっていたのである。そんな中、急にリトアスによりオーガ侵攻を命じられた。

戦争により勝者が得れる物は土地にその地の金品などである。そうでもない

利益があがらないし、兵士達にも恩賞を出せない。しかしリトアスは指輪だけを

欲したのである。レイリとしてはますます訳がわからなかった。

なのでレイリもオーガ国を侵攻したものの国民には全く被害を与えていない。

ここアークス城でしか戦はおこしていないのである。

指輪による竜人王を封印した1000年前の大戦はレイリも知っている。そして

封印を解くことも知っている。けれども肝心の竜人王の眠っている場所は伝説では

語られていなく、それに従って封印を解く宝石もあまり価値がなくなっているのである。

戻ったら陛下に今回の侵攻の意味を問うてみよう。

そんな考えにレイリがふけていると、1人の兵士が近づいてきた。

「レイリ將軍！ラクロス王の処遇はいかがなさいますか？」

王室にいた兵士達のうち隊長とおぼしき者がラクロスの今後の処遇について

尋ねてきた。

「私は一度報告するためにコーネリアに帰還します。ラクロス王は新たに指示が

出るまでは、ここの牢にいられておいってください。」

そう言い残し、兵士達に任せてレイリは部屋を後にした。

アークス城の城門まで来るとレイリは何かを探すように空を見上げた。

見上げた遙か上空には黒い点があり、空をくるくる旋回している。普通の人が見れば鳥だろうと思うだろうが、レイリにはそれがはっきりと何であるかはわかっていた。その黒い点に向かい

「リユーガ！おいで！」

そう叫ぶと上空の黒い点は空を切るような鋭い音を出し、レイリめがけて一気に急降下してくる。

それは着地の際に風を巻き起こしレイリの前に降り立った。

全身真っ黒で頭の前から尻尾の先までは4mはありそんな飛竜が降り立ったのだ。

レイリがリユーガに騎乗し

「行くよ、コーネリアまでおねがい」

そう言うときリユーガはそれに応えるかのごとく、低い遠雷のような力強い咆哮をし、一気に上空まで羽ばたいた。

そしてあつと言う間にレイリとリユーガは見えなくなってしまった。

こうして鉄壁の守備を誇ったアークス城は陥落し、同時にオーガ国

の900年の長き歴史にも

幕が閉じたのである。長年に渡り友好関係が続いていた国によって・
・。

この戦いを期にリフラスタ大陸は混乱の渦に巻き込まれていくことになる。

レイリがアークス城を去ること少し前。

オーガ国の南に位置するジュライ国の王ディールに密偵より報告が入っていた。

オーガ国が落ちたと……。尚オーガ侵攻軍の指揮官にはレイリ將軍がついていた。

街に対する被害はなく、アークス城のみでの戦闘となり、被害者はあまり出ていない。

また、侵攻の目的は3大国に代々伝わる伝説の宝石だったという。

オーガ国は紅い宝石が指輪として受け継がれてきているが、ここジュライにも

緑の宝石が指輪になり受け継がれてきているのである。

今回コーネリア国はオーガ国を指輪欲しさに滅ぼしたがそうとなると次はジュライ国に

攻め入ってくる可能性がある。可能性ではなく、まちがはなく。ディールは確信していた。

コーネリアには青い宝石の指輪がある。そして今回のオーガ侵攻により紅い指輪を

手に入れた。指輪の使用用途はこうなるともはや1つしかない。国1つ滅ぼしてコーネリア国が

指輪をほしがる訳は竜人王の復活にあるだろう。

そして3つ目の緑の宝石の指輪はここジュライにある。ディールが確信にいたるには

充分すぎるほどに状況が出来上がりすぎていたのだ。

ディールは玉座に座し、深刻な顔で思考をめぐらせていた。どうすれば宝石を守れるか、

どうすればジュライ国を守れるだろうか。

傍に控えている文官が心配そうに声を漏らす。

「陛下、ジュライとしても何か対応を取らなければ」

「わかっている。しかし、まだこちらから大胆な動きはできん。

向こうに攻め易くする口実を与えてしまふ」

このままいけば指輪欲しさにコーネリア側は必ず攻め込んでくるだろう。

しかし保守的なディールはこちらから火の種を撒くことはしたくないのだ。

「少し考えてくる」

そっくり残しディールは玉座を後にした。部屋から出て石造りの堅固な廊下を抜けると

広い広い中庭に出れる。まぶしい光を浴び、ディールは目を細めた。ここグラントヒルズ城の設備は整っており、中庭の中央には兵士達の訓練する場所として

屋根のついた円形の闘技場が設けられている。月例会などの試合の時にはたいへんにぎわう

場所になっている。昼間は兵士達はここの中で訓練をしていて

ディールは考えにつまづいたり、気分転換したい時などにはよくここに足を運ぶのだ。

ディールは闘技場の中に足を踏み入れた。闘技場の中には戦いを観戦できる客席も

用意しており、戦いを観戦できるようになっている。

ディールは兵士達を眺めていると昔の自分を思い出す。

ディールは文官としての能力は非常に長けていた。温厚で協調性のある性格をしており

外交なども上手くやっていける。しかし、まだ王に就く前は自分も武術の訓練を

させられていたのだ。体術も出来なく、剣もダメ。魔法はというと魔法にも才能はなかった。

この兵士達の中にもそういう人間は少しはいるだろう。しかしディールの目には精一杯頑張っている

兵士しか目に映らない。誰もが国のことを思い日々鍛錬に明け暮れているのだ。

そういう兵士達を見ていると俄然とやる気が沸いてくるのである。

戦えない分少しでも戦を避け、少しでも平和な道を選ぼう。自分ができることは

それくらいしかないのである。そんな考えの中でボーっと

入り口につつ立ち、中で訓練している兵士達を見ていると1人の黒髪の若者が近づいてきた。

年齢はもう18歳になるが悪戯っぽい青い瞳をしているせいで、実年齢よりは若く見える。

「また考え事ですか？父さん」

ディールは溜め息をつき、顔をしかめた。

「ここでは王と兵士だろう、マルク。訓練に戻りなさい」

マルクというこの若者はディール王の息子にして時期国王候補なのである。

ディールとはちがい、非常に剣と体術には長けている。文官として

はどうかと言うと

向いていないような気がする。あくまでディールに言わせればだが。得意げな顔をしてマルクが話を切り出した。

「オーガ国が落ちたって話し聞きましたよ」

「もう知っているのか、マルク」

なぜかはわからないがマルクはこういう外の情報を仕入れるのがやけに早い。

ディールもつい先ほど密偵により知らせを受けたばかりなのだが、なぜマルクも

知っているのだろうか。たまに驚かされる。

ディールの気持ちを知ってか知らずか、マルクは更に追い討ちをかけてきた。

ディールの目をじっと見据えて、

「でも、父さんのことですから、ジュライから先に目立った行動を取る

わけにも行かない。ってところじゃないですか？」

ズバリその通りである。ディールはオホンとワザとらしく咳払いをし、

マルクから視線を外し、訓練している兵士達の方に目を向けた。

「まずは戦のためじゃなく先遣隊として、コーネリア国に何人か送ったらどうですか？」

今だという風にマルクは話を進めた。

「例えば僕とかどうですか？話し合いがこじれても全員倒せますよ！」

ディールは苦笑してしまった。

倒せますよ！じゃない。そんなことしたら大騒ぎになるではないか。マルクは頭が良いのか悪いのかたまにディールは不思議に思う。

「コーネリア国に人を向けるにしろ、数人程度だろう。それにまちがってもマルク、

お前を行かせるわけにはいかない。」

マルクがコーネリアに行き捕虜にでもなれば、それこそコーネリアは要求をゴリ押し

してくるにちがいない。指輪をよこせという要求を。

それこそ今一番避けねばならない事態だ。それにリトアス国王は今や前線を引いて

はいるものの、少し前までは最強の魔法使いとしてその名を大陸中に轟かせていたのだ。

そして今でも彼に勝る魔術師はいないと言われている。さすがはあの英雄コーネリアの

血を引いているだけはある。

ディールが一人思考モードに入ったことを確認すると、マルクは訓練に戻っていった。

この時マルクの背中しか見えていなかったディールはマルクの青い目が計画に向けて

キラキラ輝いていたのを知る由もなかった。

「……………」その夜、月がのぼり薄暗闇が包み込むグランドヒルズ城に
不審な動きをする者が1人。マルクである。黒いマントを羽織って
いて、怪しい。

「金だけあればいいか。それとコレ！」

そう言う壁に立て掛けてあった剣を左腰に備えた。小さい頃にデ
イルから
私には使えない物だから、と譲り受けた剣である。その名をカリバ
ーンと言
い
なかなか業物だと聞かされた。準備が出来て、自室の扉からそ
と出る。

音がでないように静かに扉を閉めた。

グランドヒルズ城では毎晩決まった時間に巡回の兵士が見回りをし
ている。

その巡回コースにももちろんマルクの部屋の前の廊下もあるのだが、
そこは事前に

調べておいてある。廊下に出て巡回兵士達の足音が聞こえないこと
を確認した。

「俺ってしつかり者」

1人、計画の万端さに感動するマルク。まだ部屋を出たばかりなの
だが。

ロウソクの明かりしかない薄暗い廊下を歩きながら城門を目指す。
城門を通るには中庭の広場を通って行かなければならない。

マルクは中庭の入り口につくと姿勢をかがめて中庭の様子を窺がった。

頼れるのは月明かりのみでありよくは見えない。ここの広場には樹木が立ち並んでいて、昼休み時にはよく兵士達が休憩場所として使っている。

樹木の作る影などに座り、仲間同士での談笑を楽しんでいるのだ。そして今この時間となつては警備兵が木のかげに隠れていたりするので

警戒しなければならない。ここで見つければ王に報告されて、そのまま屋戻され、

厳しい監視体制をとられるだろう。それだけは避けなくては。

一通り入り口から広場を見回すと人はいない。

一気に広場を通過すると城門の前付近までやってきた。茂みに身を隠し、城門を

見ながら、はあくっという風に1人言葉をもらした。

「やつぱここには見張りいるよなあ」

城門の両脇には槍を構えた二人の兵士が立っていた。ここを通れば、もう自由になれるのだが

ここはそうもいかない。もちろん手は打ってある。

「そろそろのハズなんだけどな。それにしても真面目に見張りなんかやって楽しいのか。」

マルクが門番に対し、1人で愚痴を言っていると城門の前にフラッと全身に真っ黒い

ローブを羽織った者が近づいてきた。顔にも深くフードをかぶっており、顔も

全然見えない。その足はどんどんと城門に向けて近づいてくる。

兵士もさすがに、その者の異様さを感じ取り、何者だ！と声を荒げた。

その黒ローブの者は何も答えなかった。しかしぼそっと小声で何かを唱えると

兵士二人は両手で目を覆いその場でしゃがみこんでしまった。

「うお、何だこれは?!」

「どうなってる！急に真っ暗になったぞ！」

黒ローブの者が頭上に手を振り上げ、合図を出した。

それを確認したマルクは茂みから飛び出し一気に城門を駆け出した。それに黒ローブも続いた。

マルクは走りながら隣を走る黒ローブ、いや、今は走っているせいでフードが取れて

しまっているその男に感謝の言葉をつげた。

「助かったよ、ケイミ！さすが魔術師！どんな魔法使ったんだ？」

賞賛しまくるマルク。このケイミという男はと言うと

髪の毛先がところどころクルっとしていて猫のような瞳をしている。そんなあどけない猫のような瞳にいつもニコニコしているので

あどけなさがあり、18歳よりは若く見える。

「僕の魔法は置いといてさ、それよりこんな襲撃みたいな感じにしないで

裏口から出てきた方早かったんじゃないの？」

ここでケイミの言う裏口というのはグランドヒルズ城にマルクが抜け出す用に作った

通り道のことで、その存在はマルクとケイミの二人しか知らないのである。

マルクは王子だが、ケイミは平民であり二人が出会ったのもマルクがその道を通り
外で1人、遊んでいた時のことだった。

「そりゃーダメだ、ダメ！絶対ダメ！わかってねーよ、ケイミは！」
マルクは両目をつむり、ワザとらしく溜め息をついたりしている。
ケイミは何がダメなんだ、というように首を傾げていた。
そんなケイミを見やりマルクは自分の考えを述べた。

「今回ののはちゃんとした旅立ちだ！そういうのは正々堂々正門から
だろー！」

大分走って来て、遠くに小さくなって見えるグラントヒルズ城の城
門に
腰の備えてあったカリバーンを抜き、高らかにかざすマルク。
ただこういうポーズをしたかっただけなんだな、ケイミはそう思っ
た。

「ねえ、でもさ、僕が協力した時点で正々堂々とかじゃないんじゃない？」

すかさず横槍を入れるケイミ。ニコニコした目はマルクを見据えて
いて、
次なるマルクの動きを楽しそうに観察している。ケイミはマルクの
観察が
おもしろくてたままない。突拍子もなくいろんなことをするから見
てて飽きないのだ。

「そこは男なら気にするな！ケイミ！」

ははは、とケイミの肩を遠慮もなくバシバシ叩く。

「それにしてもディール王には内緒で良かったの？今最もキケンな所に行くのにさ。」

ケイミは口では心配しているがニコニコしていて、それが本心でないことがわかる。

実のところケイミ自身、今回のコーネリアの内情調査（マルク勝手に命名）にかなり乗り気なのである。

マルクはケイミを見やり、

「普段はとおなしく城で王子してるんだから、これくらいは黙認してもらわないとな」

そう言い悪戯に片目をつむってみせた。

一国の王子の蒸発を、これくらい、と言うマルクに笑ってしまったケイミ。

これからの冒険に感情を高ぶらせ、こうして二人は夜の闇に消えていったのだった。

マルクとケイミの二人は月明かりの下、見渡す限りの平原を歩いていた。

ここはオーガ国とジュライ国の間に広がっている平原であり、これといった

店や宿屋もなくただ広いばかりの平原である。オーガ国に行くにはこの平原を
真っ直ぐに進むのが最短ルートになるので、二人は黙々と歩いていった。

尚、このルートを決めたのはケイミである。

しかしケイミのオーガ国を突っ切り、コーネリア国に入るというルートにマルクは

不安があった。オーガ国と言えば、つい先日にはコーネリアの侵攻があったし

荒れているのではないかと思ったのである。

もちろん、オーガ国内で誰に絡まれようと力づくで押し込めば問題はない。

だが、コーネリア兵に目をつけられると厄介な事になる。そうならばデイル王、

ましてやジュライ国全体に被害が出るかもしれないのだ。

王子が勝手に国飛び出して敵国兵に見つかり、それが原因でコーネリアがジュライに

進軍……。どうしても避けなければ。そんな考えが頭をよぎった。

「なあ、オーガ国通るってまずくないか？」

ケイミは、うん？と言う風に隣にいるマルクに視線を放った。

「コーネリアの侵攻でオーガ国も荒れてるんじゃないかってさ」

マルクは思ったままに述べた。しかし、ケイミは全然心配ないと言う様に

「そこらへんは大丈夫！僕に任せて！」

右手を丸めて胸をドンドンと叩いている。まあケイミが言うんならとマルクは
このままケイミに任せるかと、この場はこれ以上は聞き返さなかった。

そして今度は何か忘れてたという様にマルクが声を出した

「あゝ。しまった!」

今度は何。とケイミはマルクに向き直った。

「なあ、ケイミ。馬あつた方絶対速いよな?」

今頃それか!というようにケイミは、はあゝと溜め息をついた。

「馬の当てがないし、歩くしかないよ。それに一晩中歩いてれば、朝にはオーガに着くよ」

「そうだよなあ。馬どころか店もないしな・・・ん?」

何かの音にマルクは後ろに振り返った。それにつられてケイミも振り返る。

どンドンその音は二人に接近してきて、それが蹄の音だとわかった。淡い月明かりの下、二人の目の前に十数頭の馬に乗った男達が現れた。

どいつも簡素な皮の鎧を着ていて、それぞれ剣や斧などを備えている見た目からして

この大勢の男達が旅人などでないことが容易にうかがえた。

男達のリーダー格とおぼしき男が集団の前に出てきて、手にもったランプをかざし

馬上からマルクとケイミを順番に見やった。

「大人しく通行料を払えば、命だけは助けてやるぜ、ガキ共！」

マルクとケイミはポカンとして口を開けてしまっていた。まさかこんな典型的な

ヤツがいるなんて。二人ともそんな事を考えているような表情だった。

最初に言葉を発したのはマルクの方だった。

「お前、誰だ？」

マルクの一言にリーダーの男はかなり機嫌を損ねた様だった。

「この辺を仕切ってるリーズ盗賊団を知らねえのか!？」

声を荒げて言う。マルクはうるせーというように両手で耳を塞ぎ、顔をしかめた。

「通行料って、ここはまだジュライの統治領だろう。」

マルクが食って掛かった。もともとこういうヤツはあまり好きではないのだ。

「金を払う気ねえってんなら、考えがあるぜ……。」

すると集団から3人の男達が馬を進めてリーダーの男の前に出てきた。

馬を降り、鞘から剣を抜き、ランプに剣をちらつかせていた。

もはや3人とも戦闘準備万端である。親分、自分達いつでもいけま
すぜ的な雰囲気である。

マルクはというと未だに剣を鞘に収めたままであり、抜く気配すらない。

ケイミにいたっては、興味津々な目で盗賊たちを観察していた。そして、あっ、と声を出し名案が浮かんだという様に左手のひらに右手をポンッと打ち付けた。

「マルク！馬もらっちゃわない？こんな沢山いるしさっ！」

両手を開いて、盗賊団に大仰に広げてみせた。

この一言にリーダーの男はきれた。手元のランプのお陰で顔が赤くなってるのがわかった。

「ふ、ふざけんな！このガキ共をやっちまえ！！」

そう叫ぶと3人が一斉に剣を振りかざし、マルクに襲い掛かってきた。

「なんで俺なんだ？！」

マルクはカリバーンで3人の剣を見事に弾いた。

ケイミは少し離れた所に避難していて、マルクの応援をしていた。

「マルク！頑張れえ！」

少しは助けなくてもいいのに、と思ったマルクだが今は目の前の敵に集中せねば。

3人の男達はマルクからやや距離を保ち、真ん中にマルクを置き3角形になるように

陣形をとった。するとマルクの背後にいた男がマルクに斬りかかっ

てきた。

マルクは振り返ることもせず、カリバーンで振り向きざまに横薙ぎの一閃を繰り出し

相手の胸元を一気に切り裂いた。致命傷とも言える傷を負った男は、そのまま

地面に倒れてしまい、動かなくなった。

今度は正面から二人同時にマルクに向けて体重の乗った重い一撃を浴びせてきた。

反応に遅れたマルクは、避けることはせず頭上でカリバーンを横に構え、二人の斬撃を受け止めた。

「このガキ・・・！」

「なんつー力の強さだ！」

体重でごり押ししてくる二人相手にマルクは1歩も退かない。むしろまだまだ余裕ですよ、とばかりに口元が綻んだ。

「あんた達が弱いだけだ」

そう言うマルクは片方の男のわき腹に思いっきり蹴りを叩き込んだ。

態勢をくずし、ひるむ男。その隙に残った1人をつばぜり合いで押し切り、

後方にバランスを崩したところで、間合いを詰め斜めから素早い一撃を浴びせた。

正面からもろに食らい、男は鮮血を噴出し、その場で絶命してしまった。

マルクはそのまま残った男に剣を振り上げたが、後方からすさまじい光を放つ

火の玉が襲い掛かってきた。

「マルク！後ろ！」

ケイミの声に気づき、素早く真横に跳躍するマルク。間一髪のところで回避できた

火の玉はマルクに斬られる予定だった男に命中し、男は火ダルマになり、その場で

焼け焦げてしまった。一気にあたりが明るく照らし出される程の炎だった。

「今のは魔法だね。でもイマイチだったかなあ。」

のん気に魔法について解説をするケイミ。マルクが盗賊団を見やると今度は

先頭にローブを羽織った、いかにも魔術師らしき男が杖を自分の前にかざし

新たに魔法を唱えていた。するとその男の前に火の玉が出現し、みるみる大きくなっていった。

そして杖をマルクに振りかざすと火の玉は勢いよくマルクに向けて飛んできた。

ケイミがふらふらとマルクの前に立ちはだかり、右の手を開き前にかざした。

火の玉はケイミに直撃した！と思われた瞬間、手の前で止まりそのまま空中で

静止してしまった。

「やっぱりね。専門外だけど、僕でも止めれるよ。」

余裕しゃしゃきのケイミである。相手の魔術師も驚いた表情を隠

せないでいる。

ケイミは顔だけ振り返り、マルクに向けて悪戯っぽい笑みを見せた。

「おもしろいの見せてあげるね」

そう言うとケイミは向き直り、精神を集中し始めた。ケイミの体を黒いオーラが包み

それに反応しケイミのローブが、ぱさぱさと波打っている。

マルクはカリバーンを鞘に収め、もはや見物の体勢をとっていた。

間もなく、ケイミの前の火の玉がどんどん巨大化を始め、ついには直径3mは

ありそうな程までに大きくなっていた。

ケイミは右手を上にかざし、その上では巨大な火の玉がゆらめいている。

盗賊団はみんな目を見開き、その場にかたまってしまった。

しかし、ケイミの次なる行動がわかったのだろう。後続にいた盗賊団は踵を返し

一気に逃走を始めた。

「お前等！逃げるな！こらああ！！」

頭らしき男が怒鳴っていたが、聞く耳もたずにほとんどが逃げていつてしまった。

ケイミはその逃げていった集団に向けて巨大な火の玉を放った。

数十メートル先は炎の海となり逃げ帰っていた盗賊団は全滅してしまい、残るは

先頭にいた魔術師とリーダーの男の二人だけになっていた。

「か、頭ああ」

魔術師の男はケイミとの魔法の力量を感じたのだろう。もはや戦意喪失の状態である。

ケイミはちよつとやりすぎたかなあつと言った感じで自分の放った炎の海を見ていた。

「お、お前は化け物か!!」

リーダーの男ももはや戦意はなくしているようである。
ケイミはクスッと口元を綻ばせ、

「ふふつ、確かに化け物かもね。」

と悲しそうに微笑んだ。ケイミは尚も続けた。

「馬をもらう代わりにいい物見せてあげるね」

そう言うのと、もはや腰を抜かし地面に座り込んでる魔術師と馬に乗っているリーダーの男に

微笑みかけ、右手の人差し指をピツと差し出した。すると指の先端が黒光を帯び、ケイミは

そのまま空中に魔方陣を描き上げた。黒光りする魔方陣。
そつと目を閉じて、そして呪文の詠唱を始める。

「冥界の王オシリスよ、我が魔力と引き換えにこの地に死者の国の者を蘇らせたまえ・・・」

魔方陣がいつそう輝きを放ち、それと同時にケイミもパチッと目を開いた。

「出でよ!ケルベロス!」

その場にいる全員が魔方阵を見つめていた。すると魔方阵から3つ首の獣が出てきた。

体長は尻尾の先まで3mはあろうかという大きさで、その尻尾は蛇でできている。

ケルベロスが月に向かい大きく低い声で吠えた。リーダーの男は驚いた馬から落馬し、

魔術師の男はそのまま後退りしている。

「しょ、召喚魔法だ！？冗談じゃない！お前は」

ケイミは男がしゃべり終わる前に魔術師の男を指差し、ケルベロスに合図を出した。

ケルベロスはその魔術師に襲い掛かる寸前、魔術師は恐怖のあまり気絶してしまった。

もちろんケイミはケルベロスに魔術師を殺させるつもりはなかった。エグい現場は見なくなかったし、丁度良かったのだ。リーダーの男は落馬して腰を打ちつけ、動けなくなりその場で腰を押さえていた。

ケルベロスはリーダーの男をにらみつけていて、ケイミの次なる指令を待っている。

ケイミはそのまま男に近づき、

「馬もらうね？」

そう言うリーダーの男を無視し、その場に取り残された、2頭の馬の手綱を

引き、マルクの元へとやってくる。

「お前すごい魔法使えるんだな」

ケルベロスにはマルクも驚いた。いやかなり驚いた。
ケイミはニコッと笑い、

「そのうちもつとすごいを見せてあげるよ!」

そう言い、1頭の馬の手綱をマルクに渡した。ケルベロスはまだリーダーの男を

にらんでいる。それに気づきケイミは、お疲れ様、と言うと

ケルベロスは魔方阵の中に帰っていった。空中にあった魔法陣もふつと消えた。

マルクとケイミは馬に乗り、その場を後にした。

リーダーの男はへたり込んだまま、去り行く二人の背中をずっと見続けていたのだった。

一晩中馬で駆けたこともあり、オーガ国の王都ロストにいる、マルクとケイミ。

日も昇っていて、すでにロストでは人々が慌ただしく動き回っている。

商人やら、旅人やらがうごめきあっている中、両肩にコーネリア国の紋章が

入っている鎧をつけている兵士達も数人で巡回をしている。このコーネリア兵の

存在のみがオーガ国は戦の後ということを物語っていた。

オーガ国はコーネリア国に侵攻されたのだから、もつと略奪やらで荒れているものだ

思い込んでいたマルクの予想とは似ても似つかない。本当にここで戦争があったのだらうかと疑いたくなるほど、人々は普通の暮らし

を送っている

様にマルクには見えた。

馬上で周りをキョロキョロと挙動不審に見渡している友人をみてケイミは

どうしてかわかっていながらもマルクに聞いてみた。

「そんなキョロキョロしてると変に思われるよ？」

明らかに声には笑いが含まれており、マルクは唐突な問い掛けにびくつとして、馬を並ばせて隣に行くケイミの顔をまじまじと見返した。

「この状況を知ってて、オーガ国を通ろうって提案したのか？」

ケイミは、周りでいつもの生活を送っている市民を見渡しながら、

「もちろん！じゃなきゃ通るはずないじゃん」

悪戯が成功して、嬉しそうな子供の様な口調で述べた。

もちろん、なぜ、ケイミがジュライ国にいながら、この状態を知れたかはわからない。

変な化け物を出す力があるくらいだし遠視の能力でもあるのかな、と片付けるマルク。

でも、この状況には納得できなかった。

「ここって戦地だったんだよね？」

馬を進ませつつ、一応はケイミに聞いてみることにする。

「そうだよ。でも本格的な戦いはアークス城でしか起きてないんだ

よ。」

ほら、あそこら辺。と指でアークス城を示すケイミ。

高い外壁に囲まれており、悠然としている様は素晴らしく、やや遠目ではあるが、充分高大な敷地の中にあることがわかる。

「もともと、コーネリアによる不意打ちだったから、オーガ国軍は籠城しか

できなかつたんだよ。もちろんコーネリア兵は、行軍中は僕達がいる、ここも

通ったと思うけど、見ての通り全然被害は出てないんだよね。」

我ながら良く調べてある、と満足そうに説明してくれるケイミである。

マルクが国内・国外についての話をいろいろ知っているのには、このケイミのおかげなのだ。

城から抜け出して遊んでる時にケイミが話しの種として聞かせてくれる。

「自国が侵略されかけてるってのに、敵軍に手を出さない国民なんているのか？」

思ったままにケイミに尋ねてみた。敵軍が家の前を行軍していたら、普通、

石でもぶつけるだろうとマルクは思っていたのだ。

ケイミははあくまだまだだね、と目を閉じ、首を横に振っている。

「その侵攻軍の指揮官にレイリ將軍って人がついたんだけど、その人が

行軍中の軍の先頭にいて、コーネリア軍に対して何もしなければ、

町にも被害は出さないって誓いながら、今回の侵攻が行われたんだよね。」

ほぉーと感心してしまうマルク。レイリ將軍については、少しは把握している。

指揮能力や、戦場の分析も出来て剣の腕もすごいらしく、おまけに性格は

温厚で部下にも慕われている、とか言う出来すぎたやつ。

マルクは、俺とは正反対だなと苦笑してしまった。

「そんなことよりさ」

と両手でお腹を押さえるポーズをするケイミ。次なるセリフは容易に想像できた。

「どうかで朝ごはんにしない？ 僕お腹ぺこぺこだよ。」

それに眠いし！と最後に気合いたっぷりに付け加えるケイミ。

昨晚から何も食べてないし、飲んでいなく、ケイミの訴えはもつともだった。

マルクもこれには何の異議もなく、近くの宿屋に入ることにした。

馬小屋にここまで運んでくれた二頭をつなぎ二人は中に入った。まだ出来て間もないのか、二人が入ると、真新しい木の優しい香りがただよってきた。

この宿屋も例外でなく、戦の後を感じさせない所で、くつろぐにはちょうど良い場所だった。

早速、空腹を満たすため1階の食堂を目指す二人。外の景色を眺められる

見晴らしの良い窓際に席取り、やってきたウェイトレスに注文する。マルクはハムエッグにパンとコーヒー。それじゃ僕も」と

ケイミも同じものにした。

先に運ばれてきたコーヒを一口飲み、マルクが話を振った。

「そう言えば、コーネリアの今回の侵攻目的はなんだ？」

窓の外の道行く人々を観察してたケイミは、その言葉にマルクに向き直り、

「侵攻の目的？」

「そうだ！なんでコーネリア国はオーガ国に侵攻したのか、俺はまだ聞いてないんだが。」

腕を組みながらマルク自身も考えているようだった。

「僕の仕入れてある話では、どうも1000年前の竜人と人間との大戦の話しに

関係ありそうなんだ。」

ケイミは、マルクに侵攻の話を教えただけで、まだ詳しくは話していなかったのだ。

「その話しなら俺でも知ってる！3人の英雄達が3つの石で竜人王を最後に封印したんだよな。」

得意気に話すマルク。おおくと大袈裟にケイミはパチパチ拍手していた。

ケイミはマルクの話しに少し付け加える様に補足説明をした。

「そして、その石はジュライ・オーガ・コーネリア達がそれぞれ建

国した

今の3大国に預けられ、代々受け継がれてきている・・・こんなところかなあ。」

「それと今回の侵攻とどんな繋がりあるんだよ！」

マルクって先を急ぐなあ、等とぼやき、コーヒーに手をつけるケイミ。

一呼吸置いてからケイミは続けた。

「伝説では封印で終わってるんだけど、封印ということは、解くこともできるんだよ。」

そして今回、コーネリア国はオーガ国から伝説の赤い宝石を奪ったんだ。」

マルクは何かを考えているようだった。そんなマルクをよそに、ケイミは

運ばれてきた遅い朝食をパクパク食べていた。

石による封印に、石による封印の解放。

1つの結論に辿り着いたマルク。

「じゃあ、コーネリア国の目的は竜人王の復活か!？」

ケイミはパンの最後の一欠けらを食べると、まるで人事の様に

「でも伝説では肝心の封印場所が語られてないんだよね。それに石も3つじゃ足りないし。」

「伝説の石って3つじゃなかったか？」

マルクが、あれっ？と返した。確か、3人の英雄に3つの石だったはずだ。

「伝説は人間に都合の良いように省かれてる部分もあるけど、そこはデイル王からまだ聞かされてない？歴代の王は知ってるハズなんだけど・・・」

空腹を満たし、ニコニコした顔には活気づいていた。

「伝説の省かれてる部分？聞いたことないな。」

眉間にしわを寄せて考え込むマルク。

マルクは次期王だけで、実際は即位していない。だから知っているはずもないのだ。

1000年前とは言え、こんな話を知るのは3大国の王だけで充分だ。

「デイル王から正式にマルクに話される前に僕が話しちゃおっかなあ。」

どうしよっかな。」

「いいから、ここまできたら話しちゃえよ!!」

テーブルに身を乗り出しケイミの両肩を強くゆすつた。

「ちょっと悲惨な話しなだけだね。」

ケイミは珍しく悲しい目をした。瞳の奥では哀しみを訴えているかのようだった。

いや、実際訴えていたのだろう。マルクはケイミに強く追求したの

を少し後悔したが、
その反面、どんな話なのかもすごく興味が湧いた。

「人間による人間の大量虐殺」

「え？」

マルクは言葉を失った。確かに伝説ではそんなことは語られていない、マルク自身
今初めて、聞いた。ケイミはさらに続けた。

「伝説では赤・緑・青の3つの宝石になってるけど、本当は黒い4つ目の宝石が

存在するんだよ。今の3大国の国名は竜人对人間の大戦の時に活躍した英雄の

ジュライ・オーガ・コーネリアからきてるんだけど、実際にはもう1人の

英雄がいるんだよね。」

4つ目の黒い石の存在も初耳だった。ましてや伝説に4人目の英雄もいたということ自体
全然知らなかった。

「でも、その4人目はなんで伝説に登場しないんだ？」

っていうかなんでお前はそんなこと知ってるんだ？とは言わないマルク。

聞いたところで、いつものようにさらっと回避されるにちがいない。

「その4人目こそ、いや、その仲間達こそが大量虐殺の被害者なん

だよ。」

ケイミの顔からして、あまり良い話でないことはわかる。マルクは息をのみ話しの続きを待った。

「竜人達との戦いで人間は圧倒的不利な状況にあった。竜人は魔法も使えるし

筋力もすごいし、武術に関しても文句なしだった。そんな絶望の中で、人間は

ある1つのことに気づいた。竜人達が知り得ない魔法が人間にはある。

そこに人間は目をつけたんだ。そしてその魔法の最高の使い手こそが

4人目の英雄のラケシスなんだ。ラケシスとその一族による魔法攻撃の下

竜人達は一気に劣勢を強いられた。前衛には大陸史上最強の戦士オーガに

速さでは誰も敵わないとされた2刀流剣士のジュライ、後衛にはウィザードの

コーネリアにサマナーのラケシス。でも最終的には竜人王は封印って結果に

なっただけだね。」

マルクの知らない話しがどんどん出てきた。しかしケイミの話しはここでは
終わりじゃなかったのだ。

「悲惨なのはこっからだよ。」

そう言い溜め息をつき目を細めるケイミ。いつものニコニコした表情ではなく
どこか暗い影がちらついた表情をしていた。ケイミは知られざる伝説を続けた。

「ジュライを除く英雄のオーガとコーネリア、それに大陸中の人間が、そのあまりに

強力な魔法を操るラケシス達を忌み嫌い始めた。大陸を救った英雄なのに・・・。

人々の間では次第にサマナーを討伐せねばという声が高まり、オーガ・コーネリアを

中心とした討伐隊が編成されたんだ。寝込みを襲われたサマナー達は次々に

殺されていったよ。呪文唱えるのに時間かかるし、何より武術には優れてないし。

ラケシスはと言うと、瀕死の重傷を負いながらも何とか逃げのびれた。そして

歴史からサマナーは消されたんだ。4つ目の黒い宝石もね。」

「ジュライは何してたんだ？話に出てこなかったけど」

「一説によるとラケシスが逃げたのはジュライの助けがあったかららしいんだよね。」

その点については感謝してるよ。最後にマルクには聞こえないように呟いた。

マルクは伝説の武勇伝ばかりを楽しんでいたが、実際はそれだけではないのだ。

隠された部分を知り、マルクはその夜はなかなか寝付けなかった。

コーネリア国の目的が竜人王の復活であれば、大戦が起きるし、隠された伝説のような事も起こり得るかもしれない。

コーネリア国の狙いを突き止め、事によっては阻止しようと決心するマルクだった。

マルクが城を飛び出してから1日目の朝になった。

爽やかな朝。ここグランドヒルズ城近辺には雲1つなく、太陽が心地よく

照りつけていて、天気はとても良好だ。この男の天気はそうでもないが。

グランドヒルズ城の前で空に腕を伸ばし、体をほぐしている男が1人。

「マルクが城から消えた。部屋からは愛用の剣やら、金やらもなくなっている。」

もしかしたら、私の昨日の話を聞いて、単身コーネリアに乗り込むつもりで

いるかもしれない。マルクを探し出して、見つけたら助けてやってくれ。

ついでに通り道のオーガ国の今の内情について探ってきてもらいたい。」

この男が朝起きて1番に言い渡されたディールからの命令だった。そして今は出発するべく城門の前にいる、というわけである。

このピットという男は、国内外を問わず、明るみに出ていない、言わば

裏の出来事进行处理するジュライ国の隠密隊の隊長、その人なのである。

腰の左右には短剣とも言えるダガーを所持しているのだが、その細身の体をすっぽり覆う、疲れ気味の薄茶色のローブのせいで、隠れている。

髪は明るい茶色をしており、形の良い目鼻に整った輪郭は、裏の仕事任せられている様な人間には見えない。服装さえ正せばどこかの

貴族の出だろうかという気品の余さをかもし出している青年だ。

青い快晴の空を見上げ、1人呟く。

「また、マルク様の脱走ですか・・・。」

溜め息をつくピット。マルクは昔からどうやってかはわからないのだが

ちよくちよく城から抜け出しては外で遊んでいることがあるのだ。

ピットはこれを脱走を称しており、その度にマルク搜索の命令をデイルから

受けるのである。平和な世界が続いていて、隠密隊としての仕事もほぼないので

王にいろいろ使われるのは仕方のないことではあるのだが。

そのお陰でピットはマルクにやたら慣れている。

「コーネリア国関係は物騒だから、あまり関わりたくなかったんだけどな」

ピットの今の正直な気持ちである。戦いにおいては決して、弱いわけではないピット。

ただ、危険な事には首を突っ込みたくなく、平和に一生を終えたい、というのが

ピットの考えなのである。

ぐずぐずしてても何も始まらない。とつとと終わらせて、寝るか。そう思い、

気持ちを決めて、切り替えるピット。

「しゃーねえ、行くか」

と、隣で寝ている相棒の森狼のシャロンに視線を落とす。

シャロンに起きると、手で合図をしてやる。シャロンもあまり気乗りしないのか

気だるげに起き上がり、欠伸をしながら両前足を伸ばし、のびをしている。

そんなシャロンを見ながらピットは苦笑いを浮かべ、

「森の帝王たる種族がそんなんでいいのか？」

白銀の毛並みが太陽の光に照らされて、美しく煌いている。

そんなシャロンの背中を優しく撫でてやると、ふわあ、とまだ欠伸をしている。

ピットはシャロンに軽快に乗り、

「よし、まずはオーガ国に向けて出発だ！」

と言うと、シャロンは、今までの態度からは想像できない程に速く走り出した。

「こうして、シャロンと長距離を走るのは久々だな！気分はどうだ？シャロン！」

シャロンの上で当たる風が気持ちよく、ピットはすっかり、気分が良くなっていた。

走りながら、遠吠えのように、高らかに吠え、その気持ちを表すシヤロン。

更にスピードを上げた。

森狼は森の生き物の中では最強の種族であり、大陸中という広い範囲で見ても、

1、2を争うほどである。体長は2mほどで、大きいものでは最大4mまでに達するものも

存在する。知能はとても高い。性格は非常に凶暴なため、とても好戦的な種族なのだ。

しかし、そんな森狼の個体数も激減してしまった。

昔はもつと数がいたのだが、人間の発展とともに森を削られ、住む場所をなくしてしまったのだ。

また、白銀に輝く、その毛皮はとても高価なもので、デールの御触れでジュライ国では

狩猟は禁止になったものの、密猟というものは後を絶たない。

ピットがそんなシャロンに出会ったのは十数年前のことだ。ピットは例により、

脱走したマルクを連れ戻すべく、近くの森を搜索中に、罠にかかった小さい森狼に出会った。

それがシャロンだ。足を噛む罠にはまっており、足からは血を出していた。

そんなシャロンをピットは連れ帰り、一生懸命助けようと努力した。そして、そのピットの献身的な看護により、シャロンは回復し、ピットに懐くことになる。

森狼が人間に懐くことなど、まずないことであり、シャロンはとても珍しい。

ピット以外の人間には心を開いていないので、そこは他の森狼と同じであり、

今では目と目で会話も出来る！とピットは信じている。

あくまでピットは、であるが。

ピットのシャロンに対するお喋りはオーガ国につくまで、ずっと続いた。

シャロンはピットが何か言う度に、忙しそうに応えるのだった。

陽が傾き始め、空を夕焼け色に美しく染め始める頃にはオーガ国についていた。

王都についてのピットの第一声は、全然まともじゃん、この一言だった。

人々に疲れた様子も、見当たらず、市場はとてにぎわっていたし、どこも

荒らされた様子はない。時折、コーネリア国のエンブレムを肩につけた兵士を

見かけるのだが、それこそ珍しい。

結論、オーガ国の内情は全然異常なく、良好です！

さあ、帰ろうと、踵を返し、自分の任務に気づく。

マルク様を探さなければ！という一番重大な任務に。そして、ここオーガ国でマルク捕獲をミスれば

自分はコーネリア国までマルク搜索のため行かなければならない、ということ。

グランドヒルズ城の馬小屋からは馬は連れ出されていない、という話を聞いた。

つまり、マルク様は徒歩でコーネリア国に向かっていることになる！

マルクが途中で馬を奪って、自分と同じ、このロストにいるとは思
いもつかないピット。

そして、ピットはある考えにたどり着いたのだった。

自分は恐らくどこかでピット様を抜かし、先にオーガ国についてし
まったのだ、そのために

ピット様に会うためには、オーガ国で少し時間を潰さないといけな
い、つまりは

空き時間ができてしまった、どうしよう、おれ。という展開がピッ
トの頭の中にあつたのだ。

勿論、コーネリア国に行くにはオーガ国を通らなくても行けるのだ
が、オーガ国を通らずに迂回していくと、道なき道を突き進むことになる。途中途中で小さ
な村はあるのだが、

そこではゆっくり休憩することもできないだろう。・・・等とは考
えずに、簡単に結論を

出してしまったピット。しかし、後々これが効いてくるのである。

そうと決まれば、ピットの行動は早い。ロスト郊外の林にシャロン
を待機。

自分は即刻、近くの酒場に駆け込み、酒を容易。そして、肉屋に極
上の骨付き肉

2人前を調達。さあ、これで準備はできた。

シャロンがピットを見つめる。その視線にピットは気づき、

「今から飯にするからな！」

そうシャロンに言うと、シャロンは夜空に向かい、遠吠えをした。
手際よく、火を熾し、肉を焼き始める。シャロンの鞍に取り付けて
あつた、

「ピット7つ道具」の1つである、調味料を肉にふりかけ、味付けはOK。

「よし、シャロン食べ！」

そう言うとシャロンに肉を渡すと、シャロンは骨まで砕いて食べるのではないかという

すさまじい勢いで食べ始めた。

ピットも食べ始める頃にはシャロンは食べ終わっていて、火のそばで横になっていた。

「おー、やっぱ味がいいなあ！」

肉を食べ、酒を飲み1人宴会を催す、ピット。そんな楽しい1人宴会も終わり、

ピットはシャロンのわき腹に頭をのせて横になった。

ふと、現実に取り戻される。

明日マルクを探すことを考えると、どうもやる気の出ないピット。

「明日探して、いなければ、コーネリア国行きか……。」

溜め息をつき、夜空を仰ぐ。空気が澄んでいるのかとても星が煌いている。

これからのことを考えているうちにとうとうと眠りについてしまうピットであった。

建国の祖にウィザードのコーネリアを持つ、ここコーネリア国の主城でもあるクルセイル城の玉座の間にてレイリは君主たる

リトアス王にオーガ遠征の報告をしているところだった。

今レイリのいる、この玉座の間にはレイリを含め5人の人間がいる。もちろんリトアス王のことは以前から知っている。だが残り3人の

顔にいたっては
初めて見る顔であった。

1人はリトアスの座している横にひっそりと立っている男である。
レイリがオーガ遠征の指令を下された時にもそれらしき人間がリトアスの隣にいた。

しかし、その時は全身を覆う黒いローブや顔まですっぽり隠してしまふフードのせいだ

その顔まではわからなかったのだ。今も同じ黒いローブ姿ではあるが、その顔は

フードを取っており、はっきりと視認できる。豪華さのある金色のやや長めの髪に

真紅の瞳をしている。どこかの貴族の出だろうか、と思わせるような雰囲気な

漂わせている男であった。

そして残りの二人の男はレイリの両脇にいた。右隣の男は黒の短い髪に体格の良く、

長身の男である。レザーアーマーにブーツという簡素な格好をしていて、腰には

細身の剣を備えている。戦で負ったのだろうか、腕や頬には切り傷があった。

左隣の男はというと、黒い髪までは同じなのだが、小柄であり戦いには向いていない

体つきをしていた。上質な青いマントを羽織っており、綺麗な顔立ちに、見る者を

優しい気持ちにさせる青い瞳はとても似合っており、世間では美形と分類されるであろう。

レイリはオーガ国での事の次第を報告し終わると、最後にラクロスから奪った指輪を

渡した。不思議な魅力のある紅の指輪を。

「ご苦労であつた、レイリ。これがオーガ国に伝わる宝石か。」

レイリから宝石をその手に受け取り、目を細め指輪についている宝石を見つめるリトアス。

そして指輪から紅い宝石のみを取り外し、隣の黒ローブの男に手渡した。

男はローブから腕をさっと出した。そこには金のサークレットをつけており、

青い宝石・黒い宝石をはめてあり、残り2つのくぼみがあり、その1つに

リトアスから受け取った紅の宝石を収めた。

恐らくは伝説の宝石なのだろう。しかし、レイリには黒い宝石が何なのかはわからなかった。

伝説では3つのはず。青はコーネリア国に伝わる物でレイリも何度か見たことがある。

そして、オーガ国の紅の指輪をはめたということは、黒い宝石も同種のも物であろうか、

という考えにレイリは行き着いた。

レイリが考えにふけていると、男はローブの中に腕をしまってしまい、そこでレイリの

思考は中断された。

「今のがリトアス様の求められていた物ですか。」

言葉は丁寧ではあるが、どこか敬意のこもっていない口調で切り傷のある男が

口を開いた。

リトアスは玉座から、その男と青いマントの男を順繰りに見渡すと、最後にその視線を

レイリに向け、レイリには衝撃的ともいえる言葉を言うのだった。

「紹介がまだだったな、レイリよ。新しく三將軍に任命した、ジークとウィーゼだ。」

らしくもなく、レイリは、えっ、と発していた。
リトアスは気にせずにも尚も続ける。

「前の二人は解任した。」

驚きで言葉の出ないレイリ。

レイリがオーガ侵攻中という短い期間の間に国の要職に就いている人間が二人も

入れ替わったのだ。もはや、異例の事態である。

普段から冷静で表情の崩すことのないレイリだが、この時ばかりは目を見開き、口は半開きになっていた。

「前の二人は私に異を唱えたからな。」

と、冷たい表情で続けるリトアス。

リトアスは一呼吸置き、淡々を話を進めた。

「レイリには初めて話すが、私は竜人王を復活させ、完全にリフラスタを支配する。」

さらなる追撃にレイリの思考はもはやついていけなかった。

要職二人の解任に、今度は竜人王を復活させる？わけがわからない。

長身のジークはレイリのそんな様子を眺め、楽しんでいる。青いマ

ントのウィーゼに

リトアスの隣の男は黙りこくっていた。

「お前も私に異を唱えるか？」

ゆつくりと、だが、はっきりと威圧のこもったリトアスの声が玉座の間に響いた。

レイリも1000年前の竜人と人間との対戦の話は知っている。

もし、再び竜人が復活し、戦争なんになれば被害者の数は計り知れない。

そんなことになったら・・・。

「しかし、それでは大陸中を巻き込んだ対戦になってしまうのでは！」

リトアスに思いとどまってほしかった。何よりレイリ自身戦いは好きではない。

しかしながらその気持ちは通じることはなかった。

「それは異を唱えているとみていいのか？」

その言葉がレイリに重くのしかかった。

「いえ、そういうわけでは・・・。」

いつからここまで陛下は独裁的な人間になってしまったのだろうか。オーガ遠征を

命じられる少し前くらいからだ。

「ならばよろしい。問題の竜人王が封印されている場所だが、我が

クルセイル城の

地下神殿であることがわかった。」

ジークにウィーゼの二人はほお、と感心を示していた。レイリはそれどころではなく

1人呆然としていた。

リトアスはジークに視線を向けた。

「復活に際し、ジュライ国の緑の宝石も必要になる。そのためのジュライ侵攻には、

ジーク、お前に任せたい。」

「俺がジュライ国ね・・・。」

何か不満を感じ取れる様に1人呟くジーク。

次にジークからレイリに視線を移し、

「そしてレイリ。お前はオーガ国に行き、治安を治めよ。反乱分子は全員殺してかまわん。」

レイリは低頭し、

「はっ。かしこまりました。」

と言った。しかし、オーガ国は穏便に落とせたので、あまり鎮圧しなけばならない事態には今後もならないだろう。リトアス自身も今のオーガ国の内情は先の報告で把握しているはず。

なのに、なぜ私を再びオーガ国に送るのだろうか・・・。

そんな考えがレイリの頭を過ぎった。

「期待しているぞ、レイリ、ジーク。」

命令に従うしかなかった。ただでさえ、先程、意見してしまったのに、ここで

また、というわけにもいかない。

レイリはそのまま、オーガ国に向かうために玉座の間を後にしたのだった。

レイリが部屋を出て行くのを確認し、リトアスはジークにさらなる命令を下す。

「ジーク、ジュライ国を落とすのにオーガ国を通るだろう？」

気だる気にジークは返した。

「ええ、ま、近道ですからね。」

「道中、オーガ国のレイリも討て。」

ジークは口元を綻ばせた。そこには不適な笑みが浮かぶ。

「有能な指揮官が一人減ってもいいんですか？」

言葉に相反して、全く心配している気配が窺えなかった。リトアスは無表情のまま続けた。

「かまわん。私に少しでも反対する者には消えてもらっ。」

「わかりました。お任せください。」

ジークは元々は腕利きの傭兵だったのだが、レイリの噂はその頃からよく耳にしていた。どんな戦い方かも聞いており、前から1度、生死をかけた

勝負をしてみたいと思っていたのだ。

戦争のような多数対多数なんてくだらない。サシの対決の方がよっぽどいい。

日頃からのジークの持論だ。

レイリとの戦いを想像するだけで、將軍職についた甲斐があるというものだ。

そう思い、足取り軽く玉座の間を後にする。

「じゃ、俺はこれで。」

そう言い、ジークは軍隊の編成にかかるのだった。

後編

コーネリア国によるオーガ国侵攻で、ここオーガ国の内情が変わった。

オーガ国は実質のコーネリア国の統治領とされ、治安維持にはコーネリア国の

レイリ將軍が担当することになった。ラクロス王は相変わらず囚われの身であり、

地下牢に入れられている。

そして、これはまだ確証はないのだが、コーネリア国からは既に、ジュライ国に

向けて軍が出陣していて、明日にもオーガ国内を通過するということだ。

一応は戦後なので、その手の噂は流れているのではあるが、マルクがこの話を

聞いた時には、今からコーネリアに攻め込むぞ！と言って、ケイミはこれを

止めるのに苦労した。

宿屋の外は暗くなっており、窓の外にも人は見当たらない、そんな時間。

二人はそれぞれのベッドの上で仰向けになって寝転んでいた。

「明日か・・・。」

頭の後ろで手を組み、天上をぼーっと見つめながら、マルクが呟いた。

「でも、まだ噂の線があるよね。」

と、これはケイミ。二人は情報収集のために街中を歩き回り、疲労していた。

特に、ケイミはくたくたになっており、声にもいつもの明るさが宿っていない。

「明日、何かあっても対応できるように、もう寝ようよ。」

手で口を押さえながら欠伸をし、眠そうにケイミが言った。

疲れてたし、明日にならないとどう動けばいいかわからない。
マルクも異論はなかった。

「それもそうだな。寝るか。」

そう言い、マルクは枕元のランプを消した。
疲労のせいもあり、二人はすぐに眠りにつくことが出来た。

闇が世界を包み込み、マルク、ケイミの二人が
寝むりについた頃。

コーネリア国から出陣したジークの部隊はオーガ国に入っていた。
もう少しでロストと
いうところで、野営をしていたのだ。

1つのやや大きめのテントの中、その中心にはテーブルが置かれて

おり、テーブルを

囲む男達が数人。テントの天上からはランプが吊るされており、暗い室内を少しだけ

明るくしていた。明日に備えての軍議の中、指揮官のジークはいささか機嫌が

良くなかった。理由は行軍の遅さにあった。コーネリア国オーガ国は隣接しており、

ジーク1人が馬で飛ばせば半日もあれば着く。しかし、給仕部隊やら、武器を積んだ

馬車やらの動きの遅いことのせいで、もはや2日ほど経とうとしていた。

「明日朝、アークス城のレイリ將軍を討つ。」

ジークのこの口調から、テーブルを囲む騎士隊長達は、機嫌の悪さを窺えた。

静かに低頭する、騎士隊長達。

「レイリだけ討てばいいから、お前等は手を出すな。俺がやる。」

ジークは威圧感たっぷり、言い放った。

意見する者は一人もいなかった。

朝日が昇り始め、世界を明るく照らし始めていた。

そんな光り輝く太陽を背にして、1人の男が剣をアークス城にかざ

した。

その姿はとても神々しく、味方はとても心強さを得られるだろう。

「目指すはアークス城だ！行くぞ！」

そう言い、ジークは自ら先頭に出て、一気にアークス城を目指した。騎馬隊がロストに流れ込む。

早朝ということもあり、あまり人はいないのだが、騎馬隊に突き飛ばされる等の

被害が多少は出た。

マルク・ケイミはまだ眠りの中にいた。

突然、雷がすぐ耳元で鳴り響く様なすさまじい音が二人を襲った。

「うるせーよ！！！」

マルク半キレ気味に起床。

「え？なに・・・？」

ケイミは半寝状態で起床。

窓を開け、外を眺める二人。ケイミは眠そうに目をこすっていた。

「なあ、あそこって・・・。」

マルクがそう言い、指で示した。

アークス城からは粉塵が巻き上がっており、ただごとではない空気が漂っていた。

「ん〜？」

緊張感のないケイミの声。

「ケイミ行くぞ！」

マルクはカリバーンを帯剣し、部屋から勢いよく飛び出した。

「ええっ、ちょっと待ってよー。」

いつもの黒いローブを羽織り、ケイミもそれに続いた。

馬があることも忘れ、宿屋を後にする二人。この時ばかりはケイミもすっかり忘れていた。

アークス城につくと、城門は粉々に粉碎されており、マルクとケイミはそれを見て
ポカンと口を開けていた。そして、アークス城に入ると、そこは広場になっており、
そこで二人はまたもや、驚いてしまう。目の前には異様な光景が広がっていた。

アークス城最上階の玉座の間に緊張感に満ちた声が響いた。

「レイリ將軍、すごい勢いでジーク様の部隊が押し寄せてきます！」

レイリは落ち着き、その報告に耳を傾けた。そして目を閉じ、思考を働かせた。

事前にジークの部隊がロストを通過することは聞いていた。

しかし、前日にジークの部隊に対する使者を出したのだが、今も帰ってこない。

さらに今のこの状況。レイリは1人、出口のない思考に取り込まれていた。

アークス城の前では開門機の準備が着々とされており、いよいよ突撃されそうな

状況に陥っていた。そんな中、城門の前から声がした。

「聞こえるか、レイリ將軍！」

ジークはレイリのいるであろう、最上階に向けて声を張り上げた。

「陛下の命により、あんたを討ちにきた！」

レイリの周りにいる臣下達がざわめいた。

リトアス陛下の命令……？なぜ……？レイリがそんな事を考えていると、

再びジークの声が響いてきた。

「数ではこっちが圧倒的に上だ。降伏すればそっちの兵士は助けてやるぞ！」

「戦いましょう。あんな新参者にでかい顔はさせられません！」

と、これはレイリの部隊の騎士隊長。レイリは目を開き、青い瞳を

その騎士隊長に向け、
冷酷とも言える、客観的な意見を言い放った。

「兵法は数がものを言う世界です。」

騎士隊長は顔をしかめた。再び抗議しようとしたところ、瓦礫の崩れるすさまじい音が

アークス城を襲った。もちろん最上階の玉座の間も例外ではない。そして、間もなく1人の兵士が勢いよく玉座に走りこんできた。

その兵士は肩で息をしていて、ただ事でないことが、誰もが窺えた。

「門が突破されました！」

玉座の間がざわつき、レイリ以外の顔を暗雲が覆った。ざわつきが止む前に

今度はアークス城の広場とも言える場所から、ジークの声がした。

「レイリ出てこい。今ならまだ、あんた1人で許してやる！」

レイリは意を決して、ゆっくり言い放つ。

「私が行きましょう。」

玉座を後にし、ジークに会つべく広場に向かうレイリであった。

レイリが広場に着くと、向かい合う軍勢の先頭にはジークがいた。簡素なレザーアーマーにブーツといった格好だ。

ジークはレイリを見つけると口元に不敵な笑みを浮かべた。

「降伏する気になったか？」

その挑発じみた物言いに、レイリのすぐ傍に控えていた騎士が自らの剣に手をかけた。

すつと手を横に出し、レイリはそれを制した。

そして、サファイアブルーの目でジークを一直線に見つめた。

「私が捕まれば、兵士達は助けてもらえるのですね？」

「嘘はつかねえ。ただし、あんたは捕虜じゃなく、ここで死ぬ。」

レイリの後方に控えている軍勢が一気にどよめいた。一触即発の事態である。

ジークは馬から降り、ゆつくりとレイリに歩みよってくる。

「ただ死ぬだけじゃつまないだろ。剣を抜け。サシで俺を退かせられれば」

、俺達は手を引こう。」

「私は捕まれば、リトアス陛下に会うこともなく、処刑なのですか？」

「ああ、この場でな。元々、あんたを討つのも今回の仕事でな。」

そう言うとレイピアを抜剣し、右手に構えた。

「陛下との対話もままならないのであれば・・・。」

レイリも腰に備えている、やや長めの剣に手をかける。

真ん中で向かい合う二人の後ろにはそれぞれの軍勢がいるのだが、一瞬の静寂が

辺りを覆った。風が吹き、木々がざわめき、葉のすれる音もよく聞こえる。

「行くぞ！」

静寂を破るジークの声。一気にレイリとの間合いを詰めにかかった。そして、空を裂く音と共に、レイピアの突きがレイリを襲う。

刹那、レイリは剣を抜き、刀身でレイピアの軌道を自分からわずかに逸らした。

ジークはそれを見て、レイピアを引き、やや後退する。

レイリの動きには全く無駄がなく、完璧な見切りであった。レイリの軍勢からは

感嘆の声が上がった。拍手をしている者さえもいた。

剣を縦に構え、次なる一撃も流そうとするレイリ。

「それがあんたの剣・・・噂に名高いファルクスか。」

ジークはレイリの一風変わった剣を見て、述べた。

レイリの愛剣であるファルクスは変わっており、刃が内側についているのだ。

そのため、普通に扱う分には人を斬らずに済む。レイリの性格が出ているのだろう。

もちろん、斬れなくてもダメージはしっかりと伝わる。

「私を討て、というのは本当に陛下による命令なのですか？」

「そうだ。あんたが王に意見したことあったろう。あれが原因らしいな。」

まさか、あれが原因で仲間内の戦争を行うとは……。思考をめぐらす。

やはりリトアス陛下と1度話してみる必要がある。そうなるとこで死ぬわけにはいかない。

レイリは心にそう決心した。

面倒くさそうにジークは口を開く。

「もう、質問はいいのか？」

「はい。いつでもどうぞ。」

レイリの確固たる意志が、その青い目から窺えた。そして、また、その目は

ジークの次なる動きを窺っている。

「見切りの後のカウンター。あんたの戦い方だ。傭兵の間では結構有名だった。」

独白するようにジークが言った。そして、尚も続ける。

「守りの天才を俺は攻め崩せるのかどうか……。」

最後に、楽しみだ、と言うとジークは声低く笑った。

その様子からは戦いを楽しんでいることが窺えた。

直後、ジークは一步踏み込み、その勢いを殺すことなく、レイリに突きを放った。

突きの軌道は的確にレイリの急所、すなわち、胸元を狙って放たれていた。

しかし、レイリには軌道がわかっている。ファルクスの斬れない刀身で、レイピアの

軌道を流し、少しの遅延もなく、そのままファルクスで袈裟斬りの一撃を放とうとした。

その瞬間に、もっと正確に言えば、レイピアの軌道がずらされた瞬間に

ジークの口元が不敵に綻ぶ。斬り返しのみに集中していた、レイリは気づく筈もなかった。

ファルクスが当たるかという直前、ジークの嘲笑っている声がした。

「俺は騎士様じゃないんでねっ！」

レイリのわき腹に重たい衝撃が走った。ジークの蹴りがまともに入った。

「くっ」

横に体勢を崩すレイリ。ファルクスも当たっていたのだが、バランスを崩していて

ほとんどダメージになっていない。

ジークはひるむことなく、レイリに雨のようにレイピアの突きを浴びせた。

空を裂く音が何重にもなって聞こえてくる。

受け流そうにも、バランスを崩しており、ファルクスを構えられない。

レイリはあえて蹴られた威力に身をまかせ、そのまま跳び、ジークとの距離を

取ろうとした。しかし、ジークも完璧にそれについてきていた。

跳んでいるため、避けられない。ファルクスも構えられない。詰み・

レイリの頭をそんなことが過ぎった。

直後、ジークが突きを心臓に向け放った。

目の前にはたくさんの兵士。

旗にはコーネリア国のエムブレムが入っている。

ジークの部隊のすぐ後方にいる、マルクとケイミは呆然としていた。アークス城の城門は粉碎され、すぐ中では軍隊と軍隊が向かい合っている。

そしてその向かい合っている中央では1対1の戦いが行われている。1人は長身で体格の良い男。もう1人はやや長めの剣を所持している女の騎士。

動くたびにびく艶やかな黒い髪が似合っていて、形の良い切れ長の目に宿る

サファイアブルーの色も美しい騎士だった。遠目で見ても、その美貌は

ハッキリとしていた。

そして、今や二人の戦いは終わりを迎えようとしていた。

突きを避けるために、横に跳んだことが裏目に出て、その動きについていた

男が急所狙いの的確な突きを送り込んだのだ。

「あっ」

と声を出すマルク。

今まさに決着がつこうというところで、優勢だった男にスローイングナイフが

飛んできたのだ。それも確実に首を狙っている軌道だった。

それに気づいた男は突きを引き、剣でスローイングナイフを弾き落とした。

そして、当然、声を荒げる。

「誰だ!？」

マルク達のいる軍勢と向かい合っている軍勢から、くたびれた薄茶色の

ローブを纏った男が出てきた。明るい茶色の髪に目鼻の形も良く、輪郭も

整っている男だ。周りが鎧に身を包んでいるだけに、その男はとも目立った。

そしてマルクはその場違いな男に面識があったのだ。

突如として出現したローブの男は声を荒げている男なんか無視し、地面に座り込んでいる女騎士に近づいた。

「お嬢さん、お怪我はありませんか？」

等と気障に言い放ち、さわやかな笑みを浮かべ、手を差しのべている。

女騎士は困惑した表情をして尋ねた。

「ど、どちらさまですか？」

「ただの通行人です。またの名をピットと言います。」

そう言い、ピットは女騎士の手を取り、立ち上がらせた。ピットのこの登場とセリフにアークス城を沈黙が襲った。

「あ、あいつ頭おかしいのか……。」

マルクが呟いた。ケイミは微笑を浮かべながら、

「あれってやっぱり、隊長なんだ。」

当の本人ピットは尚も続ける。

「麗しの君はレイリ將軍とお見受けしますが、よろしかったでしょうか？」

そのセリフにレイリは頬をほんのりと紅潮させ、俯き加減に、

「え、ええ、そうです。」

マルクとケイミはかたまっていた。ふと、マルクが口を開く。

「レイリ將軍って純情なんだな……。」

「仕事一筋に生きると、あんな風になるんじゃないかな……。」

と肩をすくめるケイミ。

突然、ピットの頭上から剣が振り落とされた。ピットは振り返ることもせず、

すぐさま、レイリを抱きかかえて回避した。その機敏さには両軍が驚き

ざわめいた。

「俺は忘れてんじゃないっ！！」

ピットはレイリを丁寧に下ろすと、そのセリフを吐いた男をにらみつけ、

「お前は誰だ！？」

と力強く言い放ったのである。

そのセリフを聞いて思わずマルクは口に出していた。

「いや、それはお前だよ。」

クスッと隣でケイミが笑った。

完全に男はキレていた。顔が真っ赤だ。

有無を言わず、男はピットに突きを浴びせた。速さは言うまでもなく

先程より速い。ピットは驚くような速さで、避け、男の背後にまわりこんだ。

そして周りこむ時に男の左腕にダガーによる、一撃を与えていた。鮮血が

男の腕を流れ筋をつくっていた。

その男を気遣う声が響く。

「ジーク將軍！！」

ジークはその声の主を見やり、

「絶対に手を出すな、俺がやる！」

そう言い、再びピットに突きをしかける。その速さの全く衰えていない突きの嵐を

ピットは後ろに跳躍し、回避する。そして、ようやく、ジークの首から

ペンダントがぶらさがっているのに気付き、

「コーネリア国のショーグンだったかッ!」

と驚きで目を開きつつ叫んだ。それに構うことなく、ジークはピットとの間合いを詰め、

横薙ぎの一閃を放った。

ピットは右からやってくる斬撃に対し、ダガーで見事に防いだ。

ジークはすぐさま、右膝でピットの腹を正面から突き上げようとしたのだが、

ピットの行動の方が速かった。空いている左手で、もう1つのダガーを取り出し、

ジークの胸元を狙い、突き出していた。

それに気付き、ジークは後ろに跳び逃れようとした。しかし、ピットは

ジークにびったり張り付き、その懷で今や二刀流となっている、ダガーを

存分に暴れさせている。ピットの腕が動くたびに、レザーアーマーが裂け、

鮮血が舞ったりしている。思うようにレイピアを使えず、防戦を強いられるジーク。

「隊長はやる時はやるんだね。感心感心。」

先程の態度からは想像もできない今のピットにケイミは言葉通り感

心していた。

「一応は要職についてるしな。」

苦笑いをして、返事をするマルク。

二人がそんな会話をしていると、ジークが防御を捨てた大振りの蹴りを放った。

それを受けきれず、吹っ飛ぶピット。

その間にジークはピットに突きをしかけようとしたのだが、ピットは空中でダガーをジークに向けて放っていた。

レイピアで投げられたダガーを弾くと追撃をかけようとした。

が、ピットの姿は眼前からは消えていた。そして間もなく、ジークは首の後ろから衝撃がつたわるのを感じ、意識を失ってしまった。

ピットだった。

ダガーを放ち、受身を取るとその恐るべき速さでジークの背後を取っていた。

最後にはジークに肘打ちを決めたのである。その場に倒れこむジーク。

マルク、ケイミ側の軍勢を動揺の波が襲った。

「ジーク將軍が倒れた！」

誰かがそう叫んだ。指揮官が倒れると舞台の瓦解は早いもので、一気に敗走が始まる。

次々にマルク、ケイミの間を騎馬隊やらが駆けていった。

ジークの部隊がいなくなると、マルクとケイミだけが取り残され、ピットとばつちり目が合った。

「マルク様……？それにケイミ……。」

呆然と呟くピット。こうしてピットはマルクを発見できたのであった。

今、アークス城の応接間では5人の人間がテーブルを囲んでいて、その中の1人、

レイリがリトアスの計画を話しているところだった。

リトアスの計画を知り、重々しく口を開くラクロス。

「リトアスもなんで急に……。」

レイリの判断により、ラクロスはこの話し合いに参加することになったのだ。

そして、その独白とも取れる言葉に、

「私にもわかりません。」

澄んだサファイアブルーの美しい目を伏せ気味にレイリが答えた。

「とりあえず、父さんに事の次第を伝えないとな。」

と、これはマルク。先程、ピットに見つかり、ピットのせいで身分がバレてしまい、

この場に参加している。もちろんピットも参加していて、ケイミは国の要人でも

何でもないのだが、今はマルクの臣下という形で参加しているのである。

「私はクルセイル城に単身、乗り込み今一度、リトアス陛下とお話してみます。」

そう言ったレイリの瞳からは確固たる意志が窺えた。
そんなことも気にせず、レイミが口をはさんだ。

「でも、1人で行くっていうのは危ないんじゃない？」

この言葉の裏の意として、僕も行きたいな、というものがあつたのだが、

それに気づいたのはマルクだけであつた。

マルクが隣にいるレイミをちらっと見ると、片目をつむりウィンクをしている。

やれやれという風に、マルクは、

「レイリ將軍、もはや大陸全土に関わる問題です。ですからジユライ国からも

俺とレイミが同行させていただきます。」

とらしくもない口調で言った。

レイリが困惑した顔でマルクを見つめ、半ば口を開きかけたところで、レイミの
場に似合わないの明るい声がした。

「じゃ、決まりだね！」

マルクもこれに続いた。

「ピットは一旦帰って、父さんに報告を頼む。」

テーブルに手を叩きつけ、立ち上がるピット。

「マルク様っ、俺の護衛なしにコーネリア国に行くってんですか！

「？」

その様子にケイミはオーバーに溜め息をついた。

「オーバーだなあ、隊長は？」

もちろん、これはケイミが単にいつも通りふざけただけなのだが、ピットには通じない。

ピットは隣に座っているケイミに両目をくわつと見開き、

「なにい！？」

と言うと、ケイミに掴みかかり、ゲンコツを放つべく拳を振り上げた。

マルクからしたらいつもの光景である。ケイミ曰く、隊長のオーバーアクションが

おもしろくてやめられない、というものである。

「わわっ、暴力反対、マルクッ！」

と、マルクに楽しそうに助けを求めるケイミ。顔がどこか嬉しそうである。

「とにかく、ピットは一旦帰還だ、これは命令だぞ！」

ピットはマルクを見つめ、

「マルク様がそう言うのであれば……。」

と言い、ケイミを掴む手がゆるんだ。同時に拳も下ろされ、ケイミ

は事無きを得た。

ふう〜と息を吐き、その顔にはおもしろかった、という充実感が満ちていた。

「レイリ將軍、早速、コーネリア国に向いましょう。」

マルクはそう言い、レイリに出発の準備を促した。

レイリはそれに対して頷き、

「私がない間は、ラクロス様に後任を任せてもよろしいでしょうか？」

と、ラクロスに言い、おねがいします、と最後に頭を下げた。

「私は歳だし、それくらいしか役に立tenよ。」

苦笑するラクロス。頭を上げ、ほっとしたようにレイリは微笑み、

「では、おねがいします。」

と再度、頭を下げた。話がまとまり、各々が準備に取りかかろうとしたところで、

応接間にノックの音が響いた。レイリが、どうぞ、と言うと、1人の若々しい

兵士が入ってきた。形式通りの挨拶を済ませると、その兵士は口を開いた。

「ジーク様が面会を望んでいて、あまりに騒がしいもので・・・。」

若い兵士の顔色から察するに相当うるさいんだな、とマルクは推察。

どれくらい騒いでるか見ておきたいなあ、とケイミは思った。ピットは心の中で思うだけじゃなく、口に出し、行動に写す。まず、思いつきり顔を顔をしかめた。そして

「あんなヤツに騒がれたらたまったもんじゃないな。よし、俺が黙らせてやるう。」

と、言うのと、若々しい兵士に近づき、ジークの元まで案内を求めるピット。

もし、全くの部外者がこの場にいれば、今この城の主はピットだろうと

いう錯覚を起こさせる程にピットの態度は堂々としていた。

ピットは無理矢理に兵士を応接間の外に連れ出し、さっさと行ってしまった。

パタンと扉は閉じてしまった。そんなピットに何も言えず、レイリは、

ただ見ているだけだった。今も扉を見つめているレイリ。

ケイミがからかう様な口調で言葉を発した。

「愛しの隊長が行っちゃったよ、レイリ將軍？」

レイリは見てわかる程に頬を紅く染め、ニコニコ顔のケイミを見た。

「わ、私も行きます！」

そう言い、席から立ち上がり、急いで後を追った。

マルクとケイミもレイリの後に続いた。マルクはピットの心配から、ケイミはジーク観察兼レイリとピットの観察という目的からである。応接間にはラクロス1人が残されてしまった。

「若い者は元気だな。」

扉を見つめる、その目を細めて顔を綻ばすのだった。

少し歩くと、牢についた。

ジークは騒ぎまくりだった。これを見たピットは、もう少し強く打ってあげば

よかったな、と内心思った。しかし、ジークはピットの姿を見つけると、ピタっと

静かになり、まじまじとピットを見つめた。そして一言。

「俺とサシで戦え。」

ピットは自分の頭に人差し指を向け、本気で心配そうな顔をした。そして一言。

「頭、大丈夫か？」

レイリ、マルク、ケイミの3人が現場に着いた時にはジークはさらにヒートアップを

していた。鉄格子から腕を伸ばしまくり、ピットに掴みかかろうとしている。

対するピットは腕の届かないギリギリの所で片手を腰に当て、堂々としている。

ピットはマルクに気づくと、満面の笑みを顔に浮かべた。

「マルク様っ、これは名案ですよ！」

ピットはわめきまくりのジークに向き直り、

「マルク様に協力したら、後で戦ってやろう!」

と言ったのである。マルクが何か言おうとしたのだが、ジークの反応の方が遥かに速い。

「ホ、ホントか!？」

鉄格子を両手でしっかりと握り、ピットを見つめる、その目はキラキラ輝いていた。

「俺が嘘をついたことがあるか!？」

ジークの瞳をしっかりと見据えピット言った。

見た目と中身のギャップはこいつが世界一だとマルクは思った。

ケイミは、うむうむ、親の様に頷いている。レイリはその堂々としたピットを

ただひたすらと見つめていた。

ジークはピットのセリフに対し、ちらつと遠くを見て、

「あんたが嘘をついたこと・・・ない!」

と言い、再びピットに熱い目線を送った。

「そりゃ、君達は初対面もいいとこだしね。」

ケイミが熱い視線を交差させる二人を見て楽しそうに呟いた。

そして、ピットとジークはがしつと握手を交わした。

マルクはもう何も言うことができなかった。

ケイミは頷きながら拍手を送っている。そして、何故かレイリもケイミに続き

拍手を送っていた。

そしてピットはマルクに向かい、

「こいつを俺の代わりに護衛につけます。」

と言うと兵士から鍵を受け取り、ジークを出してやった。

ジークは出てくるなり、ピットに、

「約束は守れよ！」

と言うと、次にマルクが誰かを尋ねた。

マルク、ケイミが軽い自己紹介を済ますと、ジークは、

「よし、しっかり守ってやるからな！」

とマルクの肩をバシバシ叩いた。

この光景を見たケイミが、隊長が1人増えたなあ、と思った。実際、マルクも、こいつはピット2号だな、と思っていた。

こうして、マルク、ケイミ、レイリ、ジークの4人はコーネリア国に向うべく

アークス城を後にした。ピットはシャロンと帰路についたのだった。

「これだけ魔力を集めても駄目か・・・」

ジーンが緑の光を放つ石を手に取り、見つめた。既に棺の3つのくぼみには紅・青・黒の

石がはめこまれており、各々がその宝石特有の光を発している。

「今時の人間は使い物にならないな」

その奇怪とも言えるセリフをウィーゼに向けた。ウィーゼは無言のまま、ジーンを見つめているだけだった。ジーンは面倒そうな視線をウィーゼに向け、

「緑の宝石の代替エネルギーを集めるのに、今の人間では難しい様だな」

ウィーゼは表情を変えないまま、話を聞いていた。しかし、この時、ウィーゼの

右の手の内にある、魔方陣がわずかながらも黒い光を放っていた。ジーンは手にある緑の自作の石を目を細くして見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「それで？私に何を召喚してくるつもりかね？」

ウィーゼの背中を冷たいものが走った。刹那、後ろに跳躍し、ジーンと距離をとる。

宝石を地面に落とし、ジーンはウィーゼに向き直った。

「貴様は使えるから、とっておいたんだがな」

真紅の目がウィーゼを射抜く。その目からは失望、哀れみといった感情がはつきりと

感じ取れた。少なくともウィーゼにははつきりとそうわかったのだ。右手を広げ、前にかざし、呪文の詠唱を始める。手の内の魔方陣は黒光りを帯びている。

「我が名は貴方と契約交わし者ウィーゼ。冥界の王オシリスよ、ウィーゼの血の元に

この場に冥界よりの使者を送りたまえ・・・」

地下神殿にウィーゼの声が響き、魔方陣の黒光りが一層と強くなる。ジーンは

ただ、傍観しているだけだった。

「姿を見せる、サイクロプス！」

突如、ウィーゼの右手の小さい魔法陣から3つ目の巨人の体の一部が出てきた。

足が見え、腕が見え、少しずつ全体像が見えてくる。やがてその全貌が明らかになった。

ボロボロの布切れを体に巻いており、手には大人一人分はあろうかという棍棒を

ぶらさげている。緑の体をしており、獣に近い独特の臭気を放っていた。

ジーンは腕を組み、口の端を軽く引き上げらせ、

「ほお、こうして見るのは1000年ぶりといったところか」

「随分と余裕だな。これが原因で全滅したのに」

ウィーゼがサイクロプスを見ながら、そう言った。ずっとジーンを指差す。

「行け！」

その声を合図にサイクロプスがジーンに棍棒を叩きつける。横に移動することで、ジーンは攻撃から回避できた。棍棒の叩きつけられた場所はへこんであり、サイクロプスの力の強さが表れていた。軽い粉塵も巻き起こっている。粉塵を手で軽くはらい、ジーンは咳払いをした。

「どういう了見で私を攻撃する？」

「争いの元は全て断たねばならない。それがお前だ。」

再び、サイクロプスがジーンを狙い、棍棒を振り上げた。それを視認し、ジーンはローブの中の剣に手をかけた。棍棒がジーンに振り下ろされた。その瞬間、やや長めの金髪がジーンの動きに合わせて、ふわっと舞う。そして、サイクロプスの悲鳴が響いた。

棍棒を持っていた方の腕が落ち、そこから大量の血を流していた。腕をかばいながら、

サイクロプスは膝を地面につき、尚も苦痛に満ちた呻き声を上げている。ジーンは

表情を変えず、頭を垂れている、サイクロプスの首に剣を振り落とした。

サイクロプスは自らの血の海に沈んでしまった。雑作もなく首を落とすと、剣を振り、血を払った。空いている左手で金色の髪をかきあげ、真紅の目をウイーゼに向けた。

「私をあまく見すぎじゃないかね？」

ウィーゼは答えず、その場に立ち尽くしている。血の海を一步ずつ
ジーンが近づいてくる。

歩きたびに、ジーンの足元からは血の跳ねる不吉な音がした。

「私は君達、サマナーの秘密を知っているんだよ」

一步また一步とウィーゼとの距離を縮めていった。不吉な音と共に
・・。

太陽が沈み始め、空は夕焼け色に染まっている。

通り道でもあった

城下町はいつもの賑わいを見せていた。家路につく人、夕飯の買い
物をしている人、

走り回って遊ぶ子供達の姿。そんな中、3人はクルセイル城を目前
にひかえ、近場の茂みに
身を潜ませているところだった。今はレイリの偵察待ちだ。

「リユーガってカツコイイなあ」

クルセイル城上空で旋回している、リユーガとレイリを見上げて、
ケイミが感嘆の声をあげた。

「俺も乗ってみたいな」

マルクが好奇心に瞳を輝かせて言った。と、ここで不機嫌な声もす
る。

「どうでもいいから、早く行こうぜ」

ジークは腕を組み、溜め息をついていたりした。

「レイリ將軍の偵察が終わったのだ」

マルクが言葉を発してから間もなく、レイリがマルク達のいる茂みへと、リユーガを伴い降り立ってきた。リユーガの着地の際に巻き起こる風を全身に浴び、ケイミはまたしても感動している様子だった。

「様子がおかしいです」

至極真剣な顔をして、レイリが報告を続ける。

「城壁内の見張りが倒れていて、なにより、静かすぎます」

マルクが眉根を寄せ、口を開いた。

「見張りが倒れてる？　どういうことだ？」

「とりあえずさ、急がない？　異変が起こっているっぽいしさ」

とケイミが提案した。ジークもしきりに頷いている。

マルクがクルセル城を眺め、

「見張りがいないなら、このまま侵入だな」

そう言い、これに異論なかった。

門をくぐり、エントランスへと急ぐ。
入るとすぐに広いホールに出た。中央には上がるための白い手すりが際立つ
豪華な階段がある、しかし4人の目に入ったのはまず、そこら中に倒れこんだ兵士達の
姿だった。生気を奪われているかのように色の悪い顔をしている。
不安がレイリを過ぎる。

「陛下・・・！」

そう呟くと、レイリは玉座たる部屋を目指し、駆け出した。他の3人も続いた。
階段を上り、クルセイル城の中心とも言える場所に玉座の間はあった。レイリが不寐に
両開きの扉を開けると、中には玉座に腰を据え、首をうなだれている男の姿があった。

「陛下！」

レイリがリトアスに近づき、肩をゆすった。

「陛下！どうされたんですか？！」

リトアスはゆっくりと顔を上げ、心配そうに見つめるレイリの顔を

見つめた。

「レイリよ、どうしたのだ？」

そこにはレイリの知る、以前の温和なリトアスの表情があった。ケイミは敗戦を喫した

ジークがこの場にいてもいいものかと思ったのだが、次なるリトアスの言葉で、その疑問は見事に解消されることとなる。

「その者達は何者だ？」

明らかにマルク、ケイミ、ジークの3人に向けられた言葉であった。ジークがキレ気味に口を開く。

「少し前に將軍に任命された者ですが？」

誰が聞いても不機嫌だということがわかる、そのセリフにリトアスは肩眉をつり上げた。

「お前が將軍？何の話をしているんだ？その前に名を名乗れ」

もう気味などでなく、まちがいなくキレていた。

「あんな、ふざけてるのか？」

「ふざけているのはどっちかな？」

リトアスも全く譲らず言い返す。先の見えない言い争いにレイリが割って入った。

「陛下、本当にこの者を任命されたことを覚えてないのですか？」

リトアスは顔をしかめ、近くに控えるレイリを見つめ、

「レイリ、お前まで何の冗談だ・・・」

オーガ侵攻、三将の二人を解任、未遂に終わったジュライ侵攻、そして竜人王の復活。

レイリはこれまでの経緯を話した。聞き終わったリトアスは呆然としていた。

「私がそれらの命令を出したと言っのか？」

レイリに救いを求めるようにリトアスが訊いた。

「ええ、そうです」

レイリがはつきりと答える。リトアスの顔が暗くなり、俯いてしまった。

「すまない、全く記憶にない・・・」

場を沈黙が襲った。レイリは心配そうにリトアスを見つめている。

「ねえ、この場にいるべき三将のもう一人は？」

いつもマイペースなケイミが辺りを見回しながら、言った。それにジークも続く。

「ウィーゼだ。ウィーゼはどこにいる？」

リトアスには話が全然わからず、黙り込んでいた。ケイミは溜め息をつき、玉座に向って歩き出した。ケイミが玉座に近づき、

「リトアス様、少ししどいてもらえます？」

リトアスの顔を一瞬ではあるが、動揺が襲った。マルクは見逃していなかった。リトアスが玉座から立ち退くと、ケイミは玉座を横に向って押し始めた。マルク達はただそれを見ていたのだが、リトアスだけはちがった。

「なぜ、それを知っている！？」

声を上げ、ケイミを不審な物を見るように見つめた。

「魔法使いだから」

とニコつと微笑み返すとやがて玉座がどけられ、どこへ続くとも知れない道への入り口がぽっかりと口を開いた。階段が下に続いているのはわかるが、その先は暗闇に閉ざされている。

「なんだこれは？」

誰に問うでもなくマルクが呟いた。その驚き顔に、してやったり！と顔に笑みを浮かべたケイミが説明を開始する。

「これが伝説の竜人王の封印場所への入り口らしいよ」

なんで知ってるんだよ、こいつは？いつもは思うはずの事がマルクには思いつかなかった。

そして、ケイミを先頭に地下への階段を降り始めるのだった。

辺りは白い石で造られ、そのどれもが光沢を放ち、神秘的な世界を築きあげている。

その世界を壊すかの様に、祭壇らしき場所付近には血の海が広がっており、血の主と

おぼしき緑の巨体が血にまみれて、横たわっていた。男が二人対峙している。

一人はやや長めの金色の髪をしていて、真紅の目をしている貴族風の男。見に纏った

黒いローブだけが、その者の異質さを表しているかの様だった。

対するは黒い髪をしていて、上質な青いマントを羽織っていた。背中しか見えないので、

性別はわからないが、背格好から男だろうということは窺える。

マルク達がこの場に着くと、この二人の者がいて、ただならぬ雰囲気をもし出していた。

血に沈む巨体、それに片方の男は剣を右手にぶらさげている。そして、その剣には

わずかではあるが、赤い何かが付着しているのがわかる。

「ウィーゼー！」

ケイミが突然声を発した。それに反応し、青いマントの男が振り返る。

男かどうか疑わしい綺麗な顔立ちをしており、その整った顔に青い

目はとても似合っており、そこには見る者を魅了してしまう美しさがあった。まだ若さがあり、年齢はマルク、ケイミと同じくらいだろうか。遠くからで聞こえないが、ウィーゼの口が開く。

「ケイミ様・・・」

しかし、すぐに眼前の敵にすぐ向き直る。ジーンが横薙ぎに一閃を放とうとしていた。姿勢を屈めると、すぐ頭上で風を切る音がした。そのまま、ジーンから離れようとしたが、屈んだウィーゼの前には左手をかざす、ジーンの姿があった。その手がまばゆい光を発する。直撃し、対象者であるウィーゼの体が宙を舞い、ケイミ達の前まで吹き飛ばされる。急いでケイミがウィーゼを抱き起こした。そして、不安の色に顔を染め、

「一人で無茶はしないでって言ったじゃん！」

「すみません、ケイミ様」

「様は要らない！」

「はい、そうでしたね」

ウィーゼは涼しい顔でそう言うと、あまり痛みがないのか、立ち上がる際に顔をしかめたものの、服には魔法によるダメージは受けていない様だっ

た。

その様子を見ていたジーンが口を開いた。

「さすがはサマナー。着ている物もちがうか」

レイリとジークは驚きの眼差しをウィーゼに向け、リトアスの顔には暗雲が立ち込めた。

マルクは表情を変えないまま、ウィーゼを見つめている。

サマナーとは希少価値が高い。これは一般的な考えである。しかし、なぜ希少価値が高いかと

言っと、それは数が少ないからなのである。では、なぜ数が少ないのか。という答えに対し、

人々は、高等な技術が必要だからとか適当な理由で片付けてしまう。実際は全然ちがった答えが出てくるのだが、それは各国の王しか知らない。

サマナーの間でも一部の者しか知らない事柄なのだ。だから、レイリとジークの反応は

当たり前と言えるものだった。誰もがそついう驚きの目でサマナーを見るのだから。

ジーンが首を傾げ、顎に手を当てながら、

「ん？リトアス・コーネリアもいるということは催眠が解けたのですかな？」

リトアスが訝しげに質問する。

「催眠・・・？」

「ええ、石を手に入れるには貴方の権威が必要でしたから。思う存分操作させて

いただきました」

と、何の悪びれた様子もなく、ジーンが言い放った。ジークがいるのを知り、ジーンが
気だるげに話を続けた。

「竜人王の復活にはジュライの緑の石も必要。だから、私はこれから、ジュライまで
行かなければならないんですよ」

言い終わると同時にジーンのローブを破り、背中から翼竜の持つ黒い翼が開かれた。

「飛ぶ前に計画に支障の出る反乱分子は片付けなければ・・・」

ウィーゼとケイミを除き、全員がその翼に驚いている、その瞬間。

ジーンが翼を羽ばたかせたかと思うと、その姿がぶれて見えた。一気に距離が縮み、

まず、ジークに襲いかかった。ジークは振り落とされた一撃を頭上で何とか

受け止めたが、二撃めの拳がすぐさま腹を襲う。膝を持ち上げることで、相殺に持ち込もうと

したが、ジーンの拳は常人では考えられないほどの威力を秘めていた。堪えきれずに、後ろに

バランスを崩してしまうジーク。その隙をジーンは見逃さない。袈裟斬りに剣を振り、

ジークの体には致命傷とも言える傷が出来てしまった。鮮血が舞い、その場に倒れこんで

しまうジーク。そのジークが倒れるよりも早く、次なる行動をジーンは起こしていた。

すなわち、近くに控える、ウィーゼの襟元を掴み、祭壇の方へと思
いつきり投げつけた。

高いところから落ち、床に体を強打し、ウィーゼ苦痛に顔を歪める。
投げたかと思うと、ジーンは剣をリトアス向けて斬りつけてきた。
剣を構える隙もなく、

レイリが主人をかばうため、身を挺してリトアスをかばった。レイ
リは背中に直撃を浴び、
その背中を真っ赤に染めた。

「レイリ！！」

地下神殿にリトアスの悲痛の叫びが響き渡る。

崩れ落ちるレイリを抱きかかえ、その名を何度も呼び続けていた。

そんな二人にジーンは無情にも更に追撃を加えるべく、剣を振りか
ざす。寸前のところで

マルクがジーンの前でリトアスとレイリを守るべく、剣をカリバー
ンで受け止めた。

「リトアス様は早く治癒魔法を！」

高く澄んだ金属音になった。ジーンは受け止められた剣を退き、手
首を返し、今度は

横から斬りつけようとしたところで、黒光りするエネルギー体がジ
ーンを襲う。

それを翼を羽ばたかせ、高く飛び回避した。そして、放った者であ
るケイミに目を向ける。

「なかなかのウィザードだ」

そう言い、音もなく地に足をついた。そこで空に描かれた魔法陣に

ジーンが気づいた。

「僕はウィザードには属さないよ」

その言葉に呼応するかのように魔方阵の黒光りが強い輝きを放つ。ジーンが目を細める。

「召喚……。君もサマナーか」

このジーンの言葉にマルクがケイミにじと目を向けた。

「ケイミはサマナーだったのか?!」

ケイミは困ったように笑いながら、口を開いた。

「召喚はサマナーの特権なんだよ」

「それならもつと早く言えよ!」

ケイミは肩をすくめ、眉根を寄せた。

「僕、前にも召喚して見せたことあるじゃん!」

マルクは言葉を濁した。確かに、ケイミの召喚を見るのはこれが初めてというわけじゃない。

以前にも見たことはあったのだ。マルクの心中を察したのかケイミが得意気に微笑み、

「ほらね、思い出した?」

納得したマルクである。召喚できればサマナーという概念がマルクには今の今までなかったのが原因だと本人も悟った。顔に苦笑いがこぼれる。突如、マルクを剣が襲う。

ケイミの方へと身をひねり、回避し、剣を構えなおす。そんなマルクの傍らではケイミの

魔方阵が明滅している。ジーンは追撃はせずに、静かに語りかけた。

「さ、何を見せてくれる？サマナーよ」

ケイミは血の海の主をちらっと見やり、

「あれよりすごいやつ」

と、あどけない笑みを見せた。目を閉じ、意識を集中させる。魔方阵の黒光りが強まり、

それに伴い、ケイミを覆う黒いオーラも強さを増す。呪文の詠唱に入る。

「冥界の王オシリスよ、ラケシスの血の元に貴方の現世への召喚を命じる。」

ジーンの目が開かれる。魔方阵からは長く美しい体を白竜が現れ始めた。白い身には鱗を纏い、

宙に浮いているその姿は神々しいものがあつた。その黒い瞳は理知的に光り、ただの凶暴な冥界の

生物というものではなかった。雷鳴のごとき咆哮をジーンに浴びせて、にらみつける。

「驚いた。あの小娘のラケシスの末裔に会えるとは・・・」

マルクはまたもや、ケイミにじと目を向ける。視線に気づき、ケイミが先手を取る。

「別にマルクに訊かれたことなかったしさ」

マルクは悪戯に微笑み、

「結構重要だぞそこ、ケイミ様？」

「そんなことより、目の前の敵に集中！」

マルクは、笑みを消さないまま、ジーンに身構えた。ケイミもジーンを見据える。

「行け！オシリス！」

主人の命に従い、冥界の王はジーンに突進していく。ジーンは身を捻り、軽々と回避したのだが
その回避先にはマルクが剣を突き出していた。ジーンの腕を一筋の血がしたたり落ちる。

呆然とそれを見つめ、ジーンが口を開いた。

「人間ごときが……」

声は殺気に満ちていた。そんなジーンにオシリスが息吹を吹きかける。見事に命中し、
その衝撃波がジーンを中心にドーム型に拡がりを見せた。場が激しい光と粉塵で満たされる。

ジーンとの距離をとったマルクは今やケイミと並び、様子を見守っ

ていた。粉塵が止み始める。
オシリスの攻撃を直に食らった者がやがて姿を現す。人とは呼べぬ、
その姿にマルク、ケイミが
絶句した。体は何倍にも大きくなり、紅い皮膚が美しい輝きを放つ。
目は鋭く、真紅の目が
その者の性質を表していた。顔は爬虫類のそれに等しく、頭部から
は無骨な二本の角が
はえていた。二人の目の前には伝説に伝えられる竜が存在していた。
地に足をついているので
オシリスとはタイプは異なるが、こちらは逞しさのある竜だった。
その異形の者が口を開いた。

「1000年前、私は無力だった。仲間を守ることでもできずにいた。
しかし、今はちがう」

マルクは聞かず、意を決し、飛び掛った。頭上に剣を振りかざし、
思いっきりカリバーンで
ジーンに斬りかかった。見事に刃先はジーンを捉えた。

「なにっ!？」

鱗が邪魔をして斬れない。竜となったジーンの口が不気味につりあ
がる。刹那、風を薙ぐ音がし、
マルクをジーンの尾が吹き飛ばした。マルクは地面に打ち付けられ、
意識が揺らいだ。

「マルク!」

ケイミがかけより、肩を貸すとマルクは何とか立ち上がった。その
間、オシリスが攻防を

繰り広げている。二体の攻防に辺りは軽い震動が起こっている。オシリスがジーンに突進したが、ジーンは横に避け、オシリスの胴体を強靱な腕と掴み、そのまま床に叩きつけた。床はひび割れ、オシリスのうめき声が響いた。ジーンは口を開き、床に突っ伏すオシリスに向けた。その口には眩い光の粒子が集められ、一直線にオシリスに放たれた。直撃し、オシリスの皮膚にそのダメージが刻まれる。

「オシリス、今は退いて！」

ケイミが叫んだ。しかし、機敏に動くことも今はできず、そこを狙い、ジーンが追い討ちをかけようとしていた。その時、銀色の何かが入り口から疾走してくる。そしてジーンの頭に飛びかかった。白銀に輝く毛並みが美しい森狼の姿が、そこにはあった。

やや遅れて、ピットの声がした。

「マルク様、これを使ってください！」

一本の剣がマルクに投げ渡される。揺らぐ意識の中、マルクが問いかける。

「これは・・・？」

「ジュライの至宝でカリバーンと対をなす、聖剣エクスです！」

カリバーンとエクスを手にし、マルクが構える、二刀流なんてした

こともないのに、

懐かしいとも言える不思議な感覚がマルクを包みこみ意識がとぶ。

丁度、シャロンがジーンの頭から

跳び退いた後だった。ジーンがマルクを、いや、二本の剣を見つめ、怒りに瞳を燃やし、

「お前も血の後継者だったか。その剣で我々は・・・」

声高らかに咆哮し、マルクに襲いかかった。鋭い鉤爪がマルクに向けて放たれる。

マルクはケイミを押しやり避難させると、もはや眼前まで迫った鉤爪にゆっくりと見直った。

爪が切り裂いたのはマルクのぶれる残像だけだった。残像は塵気楼のごとく揺れ、消えた。

ジーンは背後の気配に気付き、尾でその気配の主を殴ろうとしたが、その尾に強烈な痛みが

走る。振り返ると、切断された尾が転がっていた。その尾を無表情で見つめるマルク。

1000年ぶりの恐怖がジーンを襲う。無意識にその名を口に出していた。

「ジュライ・・・」

我に返り、口に光の粒子を集める。マルクはただ黙って立っていた。

光の収束の終わりと同時に

マルクに光弾が放たれた。しかし、光弾はマルクの左手の剣、エクスに弾かれてしまい。

行き場をなくした、光の弾は壁にぶつかるだけだった。マルクが姿勢を屈めて、疾走を開始する。

次の瞬間、地下神殿に無念の咆哮が響き渡り、ジーンは地響きを起

こし、倒れこんだ。

マルクも最後の一撃を放ち、その場に倒れこむ。意識が戻る。最後には心配するケイミとピットの声が聞こえた。

「マルク！」

「マルク様あ！」

鳥のさえずりがした。開いた窓からは暖かい陽が差し込み、時折入ってくる風が、

心地良く頬を撫でる。目が覚め、体を起こすといつもの風景があった。見慣れたテーブルに
タンス。今寝ているベッド。そして……。

「マルク！目が覚めたんだね！」

どこか心配そうな顔をしたケイミがいた。

「マルク様！死ぬほど心配しましたよ！」

ピットも同じように同じ事を言った。

寝ぼけ、頭を搔きながら、

「俺、どれくらい寝てたんだ？」

「あれから、二日ですね。でも目覚めてくれてよかった！何か食事の手配してきますっ！」

そう言い残し、ピットは足早に部屋を後にした。

ケイミがテーブルとセットの猫足の椅子に腰をかけ、これまでの話をしてくれた。

「レイリ將軍も命に別状ないし、大丈夫らしいよ。コーネリア国とオーガ国でも和睦が

結ばれて、統治権も返還されたしね」

「そうだったのか」

はつとしてケイミに勢いよく尋ねた。

「あの紅い竜はどうなった?!」

ケイミは不思議そうに首を傾げ、

「マルクが自分で最後倒したじゃん」

「そうなのか? 記憶が曖昧だな・・・」

マルクは考え込んだ。でも全然思い出せない。ピットから剣を受け取ったところまでは覚えていてのだけど・・・。

「でも皆無事でよかったじゃん!」

ケイミが明るくそう言つと、マルクもつられて、顔が綻ぶ。突然ドアが勢いよく開き、ピットが最初に駆け込んできた。そしてもう一人も
やや遅れて入ってくる。

「てめえ！約束は守れえ！！」

レイピアを振り回し、ピットに襲いかかる。ジークだった。ピットは部屋を横断し、開いた窓に足をかけ、今にも逃げ出せる状態になっていた。

「マルク様！今、食事が運ばれてくるんで、しばしお待ちをっ！！」
そう言うのと飛び出し、逃げていった。ジークもそれに続き、後を追った。

「ぜってえ、逃がさねえ！！」

嵐が去り、部屋はまた静かになる。ケイミが二人の去った方向を見つめ、

「隊長も大変なのをスカウトしたなあ」

「あいつも無事だったんだな」

マルクが呟いた。

「あの人は瀕死だったんだけど、身寄りがなくて隊長が引き取ったんだってさ」

ケイミが丁寧に説明してくれた。

「ちなみに、今は隠密隊の副隊長らしいよ」

笑みの含んだ声でケイミはそう言い、終いにはクスクスと笑い始めた。

「隠密って感じしないもんな……。笑えるよな」

マルクもつられて顔に笑みが広がる。

「あっ」

ケイミが何かを思いついたように手のひらに手をポンッと打ち付けた。

「ウィーゼも無事だから安心していいよ！それと僕のことだけど……。」

何か言いにくそうに言葉を濁した。後をマルクが意地の悪い笑みを浮かべて引き継ぐ。

「サマナーでラケシスの末裔ってことか？ケイミ様？」

ケイミは、うっとしたように顔を引きつらせた。

「内密にしといて。召喚できるってだけで人が寄ってくるんだからさ」

溜め息をつき、肩をすくめるケイミ。

マルクは首を縦に振り、

「わかった、わかった」

と笑顔で返した。それに応えるかのようにケイミの顔に安堵の色が浮かぶ。

「さて、やることあるし、僕は退散しようかな」と

ケイミはそう言い、椅子から立ち上がった。ふと突然、マルクの声。

「今回はありがとうな」

手を差し出すマルク。その言葉にケイミは目を丸くした。やがて笑顔になり、マルクに近づき、差し出された手を握る。

「こちらこそ。楽しかったよ、これからもよろしく！」

暖かい日差しの中、二人は力強い握手を交わした。

こうして歴史に残ることのない戦いは幕を閉じた。同時にマルクとケイミの冒険も
終わりをむかえたのだった。

リフラスタ昔話（前書き）

英雄の生きていた時代

リフラスタ昔話

登場人物紹介

ジュライ（ ）：17歳。青い髪に黒い目をした少年。優しい顔つきをしている。

その顔には
しかし、人間が嫌いでネガティブな面があるため、

いつも陰がかかっている。誰もが認める天才の二刀流剣士。

ラケシス（ ）：14歳。肩程まで伸びた黒い髪にパツチリとした黒い目をしている。

幼い頃からサマナーとしての素質があり、竜人達との戦いでは

活躍した、英雄の一人。大人びた表情を常にしているが、慣れた

人間の前では感情表現はとても豊かな少女。この歳にして冥王オシリス

との契約を結ぶ、歴代最強のサマナー。

オーガ（ ）：22歳。短い黒の短髪に黒い目。大陸1の怪力の持ち主で

竜人と比較しても、全然劣ることがない。戦う時は巨大な斧で戦う。

あまり細かいことにはこだわらず、ただ戦うのを好む。

コーネリア（ ）：24歳。残る4英雄の一人。金色の長い髪に澄んだ青い目。

その均等の取れた顔には誰もが見とれてしまう。

しかし、性格は

クールで、あまり他人との接触を好まない。親

しい人間には

時折、優しい一面を見せることも。雷・炎・氷

とあらゆる類の

魔法を操ることができる。無尽蔵な魔力の量は

右に出る者がいない。

家々は火に焼かれ、夜だというのに辺りは明るかった。人々の叫び、怒号が響く。

俺は今、何をしているんだろうか。【英雄】そう呼ばれ、竜人たちと壮絶な死闘を繰り広げた。

結果、勝つことが出来て一時はリフラスタに平和がもたらされた。

しかし、人間という生き物は油断ならない。竜人を倒し、平和になったのに今度は

未だ未知なる力を持つ【サマナー】の一族の力を忌み嫌い始め、そいつらの掃討作戦を

開始している。俺の抵抗も虚しく、この作戦が議会を通ってしまった。そして、俺も

この作戦に参加し、サマナーの集落を攻め落とそうとしている人間の一人だ……。

「ジュライ、どうした？」

汗にまみれている巨漢の男オーガが話しかけてきた。遅しい体つきをしており、

手に持つ巨大な斧が、この男の力の強さを表していた。何人仕留めたのだろうか、

衣服にはひどく返り血がついている。斧も同じようになっている。

「俺は、やはり納得できない」

そう、掃討作戦に参加しているものの、未だに一人も斬れないでいる。左右の腰に掛けてる

カリバーンとエクスは未だに血を浴びていなかった。俺を心配そうに見つめるオーガ。

「気持ちはわかるが、やらないと、お前は民衆達の決議を破ることになる」

そんなことはわかってるつもりだ。でも、気持치가それに従わない。かつての同士を斬るなんて・・・。

「俺は仲間だったやつらを斬るなんてできない」

オーガの瞳にはらしくない俺の姿が映っているのだろう。やや間が空いて、オーガの

溜め息が聞こえてきた。

「それなら、お前はただこの場にいるだけにしろ。仕事はお前抜きでもなんとかなる」

オーガは非情にもそう言い残し、去って行ってしまった。俺はオーガの後姿を黙って見ているだけだった。突然、俺の後ろで声がした。

「掃討隊の人間がいるぞ！あっちへ逃げろ！」

振り向くと、男一人に小さい赤ん坊を抱えた女の人がそこにいた。女の人は赤ん坊を大事そうに抱え、道を引き返していつている最中だった。何度も俺の前に立ちはだかる男に視線を投げかけている。恐らくは夫婦なのだろう。その男は魔方阵を空中に書きなぐり、サマナー特有の召喚を始めようとしていた。今なら余裕で召喚を阻止できるし、男も切り伏せることが可能だ。しかし、俺にはどうしてもできない。召喚を許せば、俺さえも危険な目にあうだろう。それでも、おれはこいつを斬れない……。何の罪もないのに斬るなんてことはできない。竜人の時でさえ、斬るのにためらいが生じた。対象が人なら尚更だ。覚悟を決めようと、目をつむろうとした。しかし、召喚途中の男を、すさまじい落雷が直撃する。自然現象の落雷をこつも操れる人間は俺の知り得る中で一人しかいない。落雷を浴びて、炭化し、黒い煙を上げ、人の形をしたそれは崩れ落ちた。

「ジュライ、あなた何してるの？」

冷え切った声がした。辺りの炎の光で豪華なロングの金色の髪が映える。上質な白いローブに身を包み、切れ長に青い碧眼を持つコーネリアはその目でジュライにするどい視線を放った。

「召喚を許せば、あなたも危ないことくらいわかるわよね？」

事務的に話す、この口調が俺はあまり得意ではなかった。本当は心配してくれているくせになぜか、その本心を隠してコーネリアは喋るからだ。

「わかっている」

他に言う言葉が見つからない。これしか言えなかった。

「一応、あなたに私の加護はかけてあるけど、召喚獣の類によっては、ダメージを受ける

可能性もあるのよ？」

その心配してくれている気持ちは俺には伝わっている。事務的な口調ではあるけど、

いつも、仲間の心配をしてくれているコーネリアに、俺は目を合わせる事ができなかった。

「ありがとう。感謝してるよ」

上ずった声で、そう返事をした。

「もう帰りなさいな。ここに居ても辛いだけでしょう」

「それは議会の命令違反にならないのか？」

こんな時に保身を考える自分に嫌気がさす。いつからこうなったんだろうか……。

「誰も気づかないんじゃないかしら？何かあれば私がごまかしておくわ」

「そうか。いつもいつもすまない」

「いいわ。それより、ラケシスを見つけたら、わかってるわね？」

ラケシス……。今どこで何をしているんだろうか。逃げれたのだろうか。

コーネリアはまだ見つけていないらしいから、掃討隊の手からはまだ逃げれているのだろう。

「その時はわかってる。剣を抜くよ。」

コーネリアを安心させるためにもこの言葉が一番だろう。しかし、俺はその言葉通りに

動くつもりは全くなかったのだが……。コーネリアはそんな俺の心中を見透かしたのだろう。

「斬れない場合は逃げなさい。死を選ぶんじゃないわよ」

そう言い、ロープを翻し、行ってしまった。俺は家に帰ろう。情けない……。

誰も守ることなんてできやしない。俺の剣は未熟だ。心も。しばらく歩くとサマナーの集落は暗い夜の中でそこだけ明るくなっ

ている。

俺の家は深い山の中にあり、オーガ、コーネリア、あと一人以外には誰にも知られていない。

そもそもあまり人間が好きではないのだ。利己的で何を考えているかわからない。

この道を真っ直ぐ行けば家が見えてくる。ここまで来ると月明かりだけが頼りだった。

どこか遠くでは森狼の遠吠えが聞こえてくる。空には満点の星空が広がっている。

この暗い夜の世界が大好きだ。何も考えなくていいし、煌めく月や星を見ていると

心が澄んだ様になれる。俺でもこんな気分を味わえる夜は大好きだった。

家に着き、扉を開ける。部屋の真ん中には簡素な木製の四角いテーブルがあり、

その周りには4つの椅子が置かれている。窓は1つあるだけで、その窓の下にはベッドが

置かれていた。いつもの光景だ。そう思ったのだが、今晚は1つちがった。

ベッドに腰かける、一人の少女がいた。その黒い髪は綺麗に月明かりを反射している。

両手で、目をこすり、声を殺して泣いている、その姿に胸が打たれた。

その少女は俺に気づくと、顔を上げ、かすれた声を出した。

「ジュライ・・・」

月明かりしかない部屋だったが、確かに見えた。その両目は涙で濡れていて、頬には
涙のつたった何筋もの跡が出来ていた。

「ラケシス、すまない・・・」

俺は膝から崩れ落ちてしまった。ラケシスが俺に近づき優しく、抱きしめてくれた。

「ジュライは悪くないよ。今回の事はしょうがなかったんだよ」

「俺が議会のやつらを止めることができなかったから・・・!」

自分の頬を涙がつたうのを感じた。俺を抱きしめるラケシスの腕に力が入るのを感じた。

「自分を責めないで、ジュライ。悪い癖よ?」

元気づかせようと無理に明るく言ってくれている。そのラケシスの態度に更に胸の奥が熱くなった。

「ごめん、ごめん、本当ごめん」

それしか言えない。ラケシスも悲しいだろう。俺なんかよりずっとその思いが強いはずだ。

家族を失い、仲間を失い、家を失い、友達だって失った。こいつは本当に独りぼっちだ。

「ジュライ、お願いがあるの」

そう言われ、俺は顔を上げた。目の前には幼いながらも、その瞳に強い意思を秘めた

ラケシスの顔があつた。

「前向きに行こ。いっつもジュライは心配性だし、責任感が強いんだから」

そうやって努めて明るく振舞う、ラケシスに元気づけられた。

「それで、お願いって・・・？」

「これから先、何年かかってもいいから、私達サマナーが迫害されない世界にしてほしいの」

「わかった。約束する。必ず、そうなるようにする」

「うん、お願いね・・・」

そう言い、ラケシスは泣き出した。その幼い姿に見合うように・・・。

なだめるように、今度は俺が強く、優しく抱きしめてあげた。そして決意する。

必ず、人がみんな平和に暮らせる世界を作る。争いのない世界を。

そして、数年後、初代ジュライ王国の国王として、ジュライが即位することになる。

そのジュライの居城のすぐ近場ではラケシスが細々と暮らしていたのだが、時折

訪れるジュライの顔を見ては元気を与え、与えられ、長く平和な生涯を送ったと言う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195m/>

リフラスタ大戦～人物紹介～

2010年10月10日20時59分発行